



始







歴代御製集

三

大正
4. 6. 1
内交

目次

卷九

後宇多天皇……………一
伏見天皇……………五十三

卷十

後伏見天皇……………百五十五
後二條天皇……………百九十三
花園天皇……………二百四十七

卷十一

後醍醐天皇……………三百一

後村上天皇……………三百四十三

後龜山天皇……………三百六十二

光嚴天皇……………三百八十二

卷十一

光明天皇……………四百二十三

崇光天皇……………四百二十八

後光嚴天皇……………四百三十六

後圓融天皇……………四百五十八

後小松天皇……………四百六十一

後花園天皇……………四百九十三

後土御門天皇……………五百十八

歴代御製集卷九

後宇多天皇



立春天

天のかご山かすめるぞ春たつけふの空にはありける

里鶯

今や聞くらむ里人もはつねに告ぐるうぐひすのこゑ

竹鶯

うぐひすの千代のはつねはさゝたけの大宮人に春やつぐらむ

山家梅

後宇多天皇

梅が香のほふ春べは山里もものうからずぞうぐひすも鳴く

簷梅

わがやどの梅さきぬとはいはずとも人にはつげよ軒の春かぜ

梅移水

春風の香をとめくれば谷かげにかゞみくもらぬ梅のしたみづ

若草

いつのまにやくとも見えぬ春日野のけふ萌えわたる春の若草

野春雨

今いくかとぶひの野守たちいでむ若菜をいそぐはるさめの空

庭春雨

こゝろすむ老のなみだにあらそふはくさのいほりの軒の春雨

海歸鴈

春ごとにとまらぬものか蟹のすむ里のしるべにかへる鴈がね

遠歸鴈

ゆくすゑは雲路にとちて見えずともかすまで歸れ春の鴈がね

野遊

しろたへの袖は霞にうづもれて春日をくらす野邊のもろびと

遊絲

春の野の駒にぞまがふ見わたせば霞のひまにあそぶいとゆふ

見花

春ごとに咲きまさりゆく山ざくらわれを老木と花や見るらむ

關花

逢坂やゆふつけ鳥もなきわたりこずゑに明くる花のしらくも

里花

すみよしの遠里をのゝ花ざくら松にさそひてはるかぜぞふく

苗代

せきかくる苗代水のさまとくにわくるや人のこゝろなるらむ

夕歎冬

咲きつゞく岸のやまぶきかげ見えてながれはゆかぬ花の夕波

春欲暮

老が身を嶺の入日にたとへてもたのまぬ春の暮れむとすらむ

暮春月

有明のわかればやよみ今いくか暮れなげの月のかげかは

閏三月盡

一とせにやよみ重なる時にこそふたゝび春のものおもふなれ

夏

待郭公

郭公いまはまたじと待ちかねてねなむ今宵や鳴きて過ぐらむ

始聞郭公

ほとゝぎす我は初音と聞くものを又誰が里に鳴きて來つらむ

原郭公

夏きてもけふみかのはら泉川いつしかも鳴くほとゝぎすかな

獨聞郭公

人しれずわがためとてやほとゝぎすひとり寢覺の枕とふらむ

田家早苗

山ざとの門田のおもに水こえてすゞしくけふは早苗とるなり

曉盧橘

あかつきの枕に匂ふたちばなは老のねざめのをりを知りけり

山五月雨

日かずへてかさなる雲のひまもなしくらぶの山の五月雨の比

雲間夏月

たちまよふ雲間にとめよ夏の月入るべきかたの嶺をへだて、

水邊夏月

手にむすぶ水には秋のかよふとて月は涼しくやどるなりけり

夏月易明

まだ宵とおもふものから夏の夜のしらむか月の明けやすき空

庭夏草

小田わけむ人もたのまぬみやまべのやどにはしげれ庭の夏草

橋螢

夏の夜は飛ぶやほたるの玉ちりてをだえの橋に亂れゆくらむ

江螢

蘆火たくけぶりは見え難波がた入江の波をやくほたるかな

夕立雲

なるかみも雲のいづこになりぬらむよそに過ぎゆく夕立の空

秋

立秋朝

今朝のまにたもとすゞしき夏ごろも一夜にたちぬ秋のはつ風

七夕船

七夕のこよひとたのむ影なれやゆふべの月のつまむかひぶね

七夕朝

たなばたの五百機衣かさねても今朝きぬくしの袖ぞつゆけき

徑露

もろびとも道のつゆをやわけつらむ鹿なく秋の君がなさけに

原薄

わけいればあしたの原の花薄ほにいづる秋ぞふかくなりゆく

浦霧

見ずもあらず見もせぬ霧の絶間よりゆくへさだめぬ浦の船人

關月

むかしより須磨の關守せきとめて秋は月夜のながきなりけり

浦月

明石瀉なほたづねみむ秋の夜のことうらにすむ月もかくやと

磯月

浦風にあらいそなみのくだけつゝ玉ちる月のかげぞさだめぬ

山家月

秋を経て月も幾夜かすみにけむわれもふりぬる山のおくかな

遠擣衣

里人はうちもたゆまぬさごろもの絶間は風ぞさはざりける

菊露

ちぎりおく露も干とせにつもりてや老せぬ菊の淵となるらむ

尋紅葉

はるかなる嶺の紅葉のかくれねば尋ぬる道もまよはざりけり

九月盡曉

惜しめども今つきぬなりあかつきの鐘を限りの秋のわかれぢ

冬

杜時雨

染めわたすしのだの森の夕時雨千枝もちしほの色ぞまさらむ

庭霜

庭のおもに有明の月のしろたへに残ると見えておける霜かな

岡寒草

みづぐきの岡の萩はら秋すぎてかれ葉にのこる冬のゆふかぜ

池寒蘆

水鳥の青羽は冬もかれねどもあしまさえゆくいけのおもかな

江寒蘆

鳴きわたる入江のたづの聲さえて蘆屋ぞ冬のかげは見えける

掛樋氷

聞くまゝにかけひの音も絶えぬなり夜のまにこほる谷川の水

柚冬月

光そふ月のかつらは枯れもせでわがたつ柚ぞなほさかゆべき

冬牙月

月影も更けゆくまゝに霜ぞおくさゆるは冬のならひなれども

寒夜千鳥

夜をさむみさほの山風さえまさり河瀬のなみに千鳥なくなり

竹霰

さゆる夜の寐覺のところにおとづれて竹の葉そよぎ降る霰かな

篠霰

道のべのしのゝ小篠にふるあられ一むら過ぎて玉ぞみだるゝ

屋上霰

板びさし竹の柱のかりの世にうちおどろけと降るあられかな

初雪

冬もきぬさびしさまさる苔の庭はだれに降れる今朝のはつ雪

田家雪

雪ふれば門田の稻もかりにしをまたくもをなすありあけの空

閑居雪

山里の雪のうちこそしづかなれとふべき人もあらじと思へば

松雪

消えなくにまた降りつもる松の雪かゝれる枝ぞ更に折れふす

竹雪

あとたえてまがきの山もうづもれぬ音さへさびし竹の雪をれ

杉雪

三輪の山杉のしるしもなかりけりみどりを埋む雪のしらゆふ

路歳暮

世の中よいそぐは年のならひにて行くともしらぬ老らくの道

戀

不見戀

吹く風の音には聞けどいたづらに目に見ぬ中に年ぞへにける

見戀

知られじな思ふ心はわたの底みるめにやがてぬるゝそでとは

待戀

夕ぐれをなに歎きけむ待つ夜半のふけゆく空は猶ぞかなしき

厭戀

忘らるゝ身を浮雲のありはてゝなきたる空にながめわびつゝ

朝戀

袖におく露をば秋と思ひしにあくるあしたのなみだなりけり

寄風戀

色かはる人のこゝろにおく露の身を秋かぜに散るなみだかな

寄關戀

しのびつゝゆるさぬ中のへだてにて人をなこそその關守ぞうき

寄桐戀

契りしもたがはざらまし桐の葉を刻みし人のある世なりせば

寄埋木戀

人しれぬ谷のうもれ木としふりて心ひくともいかでしらせむ

寄鳩戀

わが中のにほの通路それならば池のこゝろもしたにたのまむ

寄鴛戀

つらからじうらやましくもをしどりの羽をかはせる契なりせば
雑

名所山

春ごとに匂ふさくらにあしがきのよし野の山を近く見るかな

名所橋

老らくの昔ながらの身はふりて世に渡らぬはしづかなりけり

名所池

汲みてしる水のこゝろやふかゝらむちかくなれたる大澤の池

名所河

駒とめてしばしすゞまむうちわたすひのくま川の水のしら波

羈中夜

みじかさも旅寐はわかず夏引の手引のいとのよるぞかなしき

羈中嶺

ゆくすゑもいくへ越えなむ岩根ふみかさなる嶺のあとの白雲

羈中鐘

今日もまたかさなる山を越えくれて雲の底なるいりあひの鐘

山家獸

年ふればふするの床もへだゝらでなれぬる山のおくの庵かな

夢驚

むなしくて一夜の夢はおどろくにながき迷ぞさむるかたなき

寄露無常

あだしの露はちりても又ぞおく消えて逢ひ見ぬ人ぞはかなき

懷舊淚

古いぬればもろき涙のくせとてや昔を聞けばそでぬらすらむ

獨懷舊

わきてその戀しきことはなけれども昔わすれぬひとりねの床

寄月述懷

ながめつゝ老とやつもる秋ごとになが身一つの月ならねども

平野

今もなほ民のかまどのけぶりまでまもりぞすらむ我が國の爲

不瞋恚戒

消えねたゞ富士のけぶりの空にのみ胸の思はあともなきまで

〔以上元亨三年龜山殿七百首〕

新千載集第四
句「まもりや
すらむ」に作
る、

河霞といふことをよませ給うける

音はしていざよふ浪もかすみけり八十うぢ河の春のあけぼの

春の御歌の中に

春くれば雪とも見えぬ大ぞらのかすみをわけて花ぞ散りぬる

吉野山をのへのさくら咲きぬれば絶えずたなびく花のしら雲

人々に百首の歌めされしついでに花

吹く風もをさまれと思ふ世の中に絶えて櫻のさそはずもがな

秋の御歌の中に

おきもあへずみだれにけりな白露の玉まく葛に秋かぜぞ吹く

百首の歌めされしついでに擣衣

このごろは麻のさごろもうつたへに月にぞさねぬあきの里人

釋教のこゝろを

鶯の嶺やとせの秋の月きよみそのひかりこそこゝろにはすめ
百首の歌めされしついでに釋教

まどかなるはづきの月の大ぞらにひかりとなれる四方の秋霧
百首の歌めされしついでに神祇

ちはやぶる七代五代の神世より我があし原にあとを垂れにき
神祇の御歌の中に

名もしるし色をもかへぬ松の尾の神のちかひは末の世のため
ちはやぶる神もひかりをやはらげてくもらず照せ秋の夜の月
忍戀の心をよませ給うける

此頃は野邊の牡鹿の音に立て、鳴かぬばかりといかでしらせむ

不逢戀

こむ世には契ありやと戀ひ死なむ逢ふをかぎりの命惜しまで
百首の歌めされしついでに戀のこゝろを

つれなさの限をせめて知りもせば命をかけてものはおもはじ
百首の歌めされしついでに遇不逢戀

朽ちねたゝおなじ涙の袖の色をまたも見すべき契りならねば
閑庭松といふことをよませ給うける

かくしこそ千とせも待ため松が枝の嵐しづかにすめる山ざと
除目のあした尙侍藤原現子朝臣に給はせける

そのかみに頼めしことの違はねばなべて昔の代にやかへらむ
百首の歌めされしついでに述懷

ふして思ひおきても歎く世の中におなじ心とたれをたのまむ

寄鶴祝言といふことを

葦たづの雲居に通ふ聲のうちにかねてもしるし千世のゆく末

東三條院七十路にみたせ給うける時よみ給うける

百年に君が七十路逢ひにあひてともに八千代の春や待つらむ

〔以上新後撰集〕

梅をよませ給うける

しろたへのいろはまがひぬあは雪のかゝれる枝の梅のはつ花

春月を

眺むればそこはかとなかくかすむ夜の月こそ春のけしきなりけれ

花をよませ給うける

なべて世の春の心はのどけきにうつろひやすく花の散るらむ

夏の御歌の中に

夕づく日よそに暮れぬる木の間よりさしくる月の影ぞ涼しき

うへのをのこども題をさぐりて歌つかうまつりけ

るに蟲をよませ給うける

野邊にとるわが松蟲の鳴く聲もなれしすみかを戀しくや思ふ

月の御歌の中に

あくがるゝ心はそらにさそはれてぬる夜すくなき秋の夜の月

河落葉

立田河ながるゝ水もこの頃はちる紅葉ゆゑをしくぞありける

雪を

しろたへの色より外のいろもなしとほき野山の雪のあさあけ

〔以上玉葉集〕

初春の心をよませ給うける

山川のこほりもとけて春かぜにとしたちかへる水のしらなみ

百首の歌めされしついでに春

家居してきゝぞなれぬる梅の花さけるをかべのうぐひすの聲

雪中若菜といふことをよませ給うける

袖の上にかつ降る雪をはらみつゝ積らぬさきに若菜つむなり

故郷花を

故郷にむかしわすれず咲く花はたが世の春をおもひ出づらむ

籬歎冬

さくら花散りにしのちは山吹の咲けるまがきにのこる春かな

藤埋松といへる心をよませ給うける

松が枝はみどりすくなくうづもれてむらさきかゝる池の藤波

百首の歌めされしついでに夏

鳴きすぐるならしの岡のほとゝぎす故郷人にことやつてまし

夏ぐさの花の枝ごとにおく露をさつきの玉にぬきぞとゞめむ

百首の歌めされしついでに秋

たかまどの野邊の秋風吹くたびにたもとにうつす萩が花ずり

老が世に秋のこゝろも晴れにけり六十路ちかづく山の端の月

山鹿といへる心をよませ給うける

深くなる秋のあはれをねにたてゝ峰の牡鹿も鳴きまさるなり

後醍醐天皇より菊の枝につけて奉らせ給うける御

歌の御返し

ゆくすゑはなほ長月の菊の枝にかさなる千世を君にゆづらむ

時雨知冬といへる心をよませ給うける

しぐれゆく空にもしるし神無月くもりもあへず冬や來ぬらむ

冬の御歌の中に

あらし山ふもとの鐘は聲さえてありあけの月ぞ峰にのこれる

雪満衣といへるこゝろを

けぬが上に積らばつもれ降る雪のみのしろ衣うちもはらはじ

顯密の教法の心をよませ給うける長歌

くもりなきこゝろは空にてらせども我とへだつる

うきぐもを 風のたよりに さそひ來て いつを始めと

くらきより くらき道にも まよふらむ これを救はむ

ためとてぞ 三世の佛は 出でにける 説きおく法は

さまゞに なゝの宗まで わかるれど こゝろ一つを

たねとして 誠のみちにぞ たづね入る しかはあれども

これはみな しかの園生の かぜのおと 吹初めしより

わしのみね 八年のあきを むかへても 闇をてらせる

ひかりにて 霧をいとはぬ つきならず 鶴のはやしの

けぶりより 八つのもゝ年 過ぎてこそ まことの法は

ひろめむと 説きける事は すゑつひに 三のくにづく

つたへ來て わが大和にぞ とゞまれる あまねく照す

おほひるめ もとの國とて まきばしら 造りもなさぬ
 ことわりの かく顯はれて やまどりの おのれと長く
 ひさしくぞ 國をまもらむ かためにて 代々を重ねて
 たえせねば えぶの身ながら このまゝに 悟りのくらゐ
 うごきなく 世を治むべき しるしとて 清きなぎさの
 伊勢の海に ひろへる玉を みかきもり 潮のみちひも
 手にまかせ 吹く風降る雨 時しあらば 民のかまども
 にぎはひて よろづよ經べき あしはらの みづほの國ぞ
 ゆたかなるべき

反歌

代々たえず法のしるしを傳へきてあまねくてらす日の本の國

百首の歌めされしついでに羈旅のこゝろを

過ぎにける山は百重をへだつれど一夜にかよふわが夢路かな

旅の心をよませ給うける

いづくをか家路とわきて頼むべきなべてこの世を旅と思へば

神祇の御歌の中に

稻荷山祈るしるしのかひもあらば杉の葉かざしいつか逢ひ見む

寄國祝といへる心をよませ給うける

かたぶかぬ速日の峰にあまくだるあめのみまごの國ぞ我が國

百首の歌めされしついでに神祇のこゝろを

我が國に内外の宮とあらはれてつたへしのりを今まもるらむ
 世を思ふ我がすゑまもれ石清水きよきこゝろのながれ久しき

菩提心論日々漸加至十五日圓滿無碍の心をよみ給
うける

日に添へて影はかはれど大空の月はひとつぞ澄みまさりける

三摩地現前

月のため何をいとほむ雲霧もさはらぬかげはいつもさやけし

十住心論の開内庫授寶

さとり入る十の心のひらけてぞ思ひのまゝに世をすくひける

眞言院の花を御覽じて

三つの世に常にすむべきことわりは散らぬ櫻の色ぞ見せける

百首の歌めされしついでに釋教のこゝろを

尋ね入るかた野の風を受けてこそ法をつたへし宿はしめけれ

久方の空に月日のめぐることまよひをてらすはじめなりけれ

初尋縁戀といへるこゝろを

思ひそむる心の色をむらさきの草のゆかりにたづねつるかな

百首の歌めされしついでに戀のこゝろを

山鳥の初尾のかゞみひとめ見しおもかげさらず人のこひしき
葦垣のまぢかけれどもいたづらに三とせあひみぬ契なりけり
恨みてもかひこそなけれ蟹少女いさりたく火のもえこがれつゝ
はかなしな戀も恨もうつせみの空しき世には音のみなかれて

寄池戀を

池水のその玉藻のみがくれてなびくこゝろを誰によすらむ

祈經年戀といふことをよませ給うける

貴船川うきとしなみのかゝれとは祈らぬものを袖のしらたま

戀の御歌の中に

きぬぐの袖のなみだをかたみにて面影とむるありあけの月

題をさぐりて詩歌を合せられ侍りしとき別戀の心

をよませ給うける

見るまゝにこれやかぎりと悲しきは別るゝ袖のありあけの月

嘉元の百首の歌めされしついでに雜

誰しかも松のこゝろにたぐへけむ我に相生の身をあはせつゝ

いとゞまた民やすかれといはふかな我が身世にたつ春の始は

山中瀧水といふことを

わけ入ればふかきみ山の高嶺より落ちくる瀧の音のさやけき

待花といへる心をよませ給うける

老が身のなほながらへて今年またふたゝび春の花や見るべき

夏の御歌の中に

道ありて亂れずもがな夏草のことしげき世にまたもまじらば

山月といふことをよませ給うける

こゝろすむはこやの山の秋の月ふたゝび世をも照しつるかな

山家

たづね來て見るもはかなきすまひかな岩根にむすぶ草の庵は

百首の歌めされしついでに哀傷のこゝろを

人の世の習ひをしれとあきつのに朝ある雲のさだめなきかな

子日祝といへる心をよませ給うける

松ならで何をかひかむ行くすゑの千年の春のけふの子の日に
位におまし／＼ける時龜山院に奉らせ給うける

みづがきの久しき世よりあととめてけふかざすてふ白菊の花
百首の歌めされしついでに祝のこゝろを

あつめおくことばの林散りもせで千年かはらじ和歌のうら松
春秋のかげをならべて見つるかなわがすべらぎのおなじ光に
契りおかむわがよろづ代の友なれやたけだの原の鶴のもる聲

〔以上續千載集〕

關路早春といへる心をよませ給うける

逢坂のゆふつけ鳥の啼くなべに明くるも待たで春は來にけり

千首の歌よませ給うけるに春のこゝろを

白雲の五百重かさねて見えつるは四方のやまべの櫻なりけり
散らばまた雪と消えなで櫻花いくたびかぜのつらさ添ふらむ

千首の歌よませ給うけるに秋のこゝろを

秋ふかき野風をさむみ小男鹿のふすや草むらつゆぞこぼるゝ
水鳥の青羽のやまは名のみして露しもおけばいろづきにけり

元亨三年八月大覺寺殿に行幸ありて人々題をさぐ
りて歌つかうまつりしついでに落葉をよませ給う
ける

山ざとは散るもみぢ葉の道絶えて冬は人目のかるゝなりけり

千首の歌よませ給うけるに蟬螢

おきつ風みるめを波に螢の袖しほたるとだに知らせてしがな

千首の歌よませ給うけるに羈旅のこゝろを

こゝろをば都にとめて天さかるひなのあら野は行く空もなし

千首の歌よませ給うけるに賀のこゝろを

つきの木のいやつきくの末までも世に仰がるゝ影とならなむ

千首の歌よませ給うけるに戀のこゝろを

この世にて浮名ながさじかげろふの岩がき淵に身は沈むとも

十首の歌めしけるついでに寄河戀をよませたまう

ける

はつせ河るでこす波のながれても絶えせぬ中と契りおかなむ

文保の百首の歌めしけるついでに戀のこゝろを

あふと見る夢も現もいかにしてゆふつけどりの音に別るらむ

二八要抄第五
句「身は沈む
とも」に作る、

寄葛戀といふことを

山がつの垣ほがくれのくずかづら恨みありやと問ふ人もなし

雑の御歌の中に

昔とて戀しきことはなけれども老のねざめにおもひ出でつゝ

嘉元の百首の歌めしけるついでに河

よしの川よしとは誰か岩波のたかきむかしのみちしたへども

千首の歌よませ給うけるに哀傷のこゝろを

見し人のさらぬわかれにおくれるて残る齡はいつを待つらむ

千首の歌よませ給うけるに釋教のこゝろを

心にてやがて心をつたふるぞ三世にかはらぬまことなりける

〔以上續後拾遺集〕

昭慶門院御屏
風押色紙和歌
第五句「跡し
のべども」に
作る、

梅を

きさらぎやなほかぜさむき袖のうへに雪まぜに散る梅の初花
岡紅葉といふことを

いろくにならびの岡の初紅葉秋の嵯峨野のゆきゝにぞ見る
人々に歌を召して合せられけるついでに庭残菊と
いふことをよませ給うける

續現葉集第五
句「なほかぜさむき袖のうへに雪まぜに散る、
わらむし」に作る、

庭のおもに老のともなる白菊はむそぢの露やなほかさぬべき
前左大臣母の十三年の佛事し侍りけるに彼の文の
裏に壽量品を書かせ給ひて包紙に書き付けさせ給
うける

はかなくて消えにし秋の涙をも玉とぞみがかくはちす葉のつゆ

釋教の御歌の中に

そのまゝに絶間をしるは誠ある三國つたはることばなりけり
釋教の心をよませ給うける

こゝろざし深く汲みてし廣澤の流れはすゑも絶えじとぞ思ふ

月の五十首の御歌の中に雑月を

とこやみをてらすみかげのかはらぬは今もかしこき月讀の神

神祇

あまつ神くにつやしろをいはひてぞわが葦原の國はをさまる

(以上風雅集)

春の御歌の中に

あらし山これも吉野やうつすらむさくらにかゝる瀧のしら絲

昭慶門院御屏
風押色紙和歌
第二句「春を
ぞ思ふ」に作
る、

嘉元の百首の歌めされけるついでに春のこゝろを
いにしへの春をぞしたふ今の世の花になりぬる人のこゝろに

徳治二年三月歌合に

難波津のむかしの風はことなれど我が世春べと咲くや梅が枝

元亨三年八月十五夜五十首の歌めされけるついで

に夏月

いづみ河遠きわたりの月かげに聲をつくして鳴くほととぎす

弘安七年九月九日龜山院に籬菊露芳といふことを

講ぜられけるに位におまし／＼けるととき奉らせ給

うける

千世ふべき菊のまがきにいろ添へて花ゆゑかをる秋のしら露

嘉元の百首の歌めされけるついでに螢を

夜ひかる玉とぞみゆる水くらきあしべの波にまじるほたるは

嘉元の百首の歌めされけるついでに月を

秋の空にあまねき月をあふぎみて我が世をてらす影と頼まむ

元亨元年九月二十六日龜山殿にてうへのをのこど

も題を探りて歌つかうまつりけるついでに七夕と

いふことをよませ給うける

七夕はわれてまたあふかゞみかと秋の七日のつきやみつらむ

「長月や」といふ事をはじめの句に置きて暮秋の二十

首の歌よませ給うける

長月や雲居のあきのこと問はむむかしにめぐる菊のさかづき

龜山殿の千首の歌に

續現集第二句
「にしきなり
けり」に作る、

春秋のにしきなればやあらし山おなじさくらの又もみづらむ

永仁五年龜山殿の歌合に落葉

橋姫の織るやにしきと見ゆるかなもみぢいざよふ宇治の川波

元亨元年十月八日三首の歌合に時雨

紅のちしほの木の葉染め捨て、雲のいづくにしぐれゆくらむ

冬の歌とてよませ給うける

冬来てはあしたの原に置く霜の寒く日ごとになりまさりつゝ

千首の歌よませたまうけるに鏡像を

ます鏡うつれるかげをそのまゝにありと見るこそ涙なりけれ

千首の歌よませ給うけるに釋教のこゝろを

水の面にうつれる月の光こそ見るには見えて取れば取られね

元亨三年八月十五夜月の五十首の歌めされけるつ

いでに

たづぬべき方こそなけれ胸のうちの月の都にいつもすむ身は

嘉元の百首の歌めされけるとき戀のこゝろを

身をくだくなみだの玉の緒をたえて我が片絲のあはで苦しき

元亨三年八月十五夜月の五十首の歌めされけるつ

いでに戀月

またいつとたのめぬ月のありあけに身のうき雲ぞ峰に別るゝ

嘉元の百首の歌めされけるついでに雜

ときしあれば谷より出づる鶯に世をたすくべき人を問はゞや

惜めども暮るゝはやすく行く年のなど人ごとの身にとまるらむ
漕ぎ出でし空しき船のよるべなみあるにまかせて世を渡る哉

元亨元年九月二十六日龜山殿にてうへのをのこど

も題をさぐりて歌つかうまつりけるついでに時雨

といふことをよませ給うける

かきくらししぐるゝ雲は過ぎぬなりこれも定めぬ世の習かな

龜山殿にて山家冬朝といふことをよませ給うける

われ住めば人目もかれず山里になほ聞き捨てぬ朝まつりごと

元亨三年八月十五夜月の五十首の歌講せられける

ついでに秋月といふことをよませ給うける

峰の月雲居も遠くなりにはけりうき世いとひしながめせしまに

〔以上新千載集〕

正安三年二月二十七日日吉の社に御幸ありて次の

日志賀の山の櫻につけて内へ奉らせ給うける

君ゆゑと今日こそ見つれ志賀の山かひある春に匂ふさくらを

嘉元元年百首の歌めされけるついでに春

空にのみ散りて亂るゝあは雪の消えずば花にまがひはてまし

元亨三年八月大覺寺殿に御幸ありて人々題をさぐ

りて歌つかうまつりけるついでに鵜河をよませ給

うける

鵜飼舟うきてかゞりの見え行くや立つ河霧のたえまなるらむ

嘉元の百首の歌めされけるついでに霰を

風さむみ空は雪げになりそめてかつく庭に散るあられかな

嘉元の百首の歌めされけるついでに海路を

いかにして人もかよはむわだの原舟と風とのたよりならずば

嘉元の百首の歌めされけるついでに初逢戀を

戀ひ死なば悔しかるべきちぎりかな命ぞ人のなさけなりける

戀の御歌の中に

忘るなと今ひとたびはいひてましありし別をかぎりとおもへば

釋教の御歌の中に

梅の花三世のほとけのためにとて折りつる袖ぞ人などがめそ

〔以上新拾遺集〕

嘉元の百首の歌めしけるついでに山吹

散る花のかたみもよしや吉野川あらぬ色香に咲けるやまぶき

嘉元の百首の歌めしけるついでに夏

過ぎにけり軒のしづくはのこれども雲におくれぬ夕立のあめ

龜山殿にて人々題をさぐりて千首の歌つかうまつ

りけるついでに月を

空にすむものならなくに我が心月見るたびにあくがれて行く

〔以上新後拾遺集〕

元亨元年九月龜山殿にて人々題をさぐりて五十首

の歌つかうまつりけるついでに納涼の心をよませ

給うける

しづかなるこゝろし澄めば山かげに我が身涼しき夏の夕ぐれ

〔新續古今集〕

嘉元元年百首の歌めされしついでに霞

春來ぬとかすみにけりな山の端の緑もうすく今朝は見ゆらむ

龜山殿千首の歌に梅をよませ給うける

梅が香のかすめる夜半は木のもとも知らでぞにほふ春の山風

龜山殿千首の歌に花を

春といへど待つこともなき世の中に花に心のなほとまるかな

尋花といへる心をよませ給うける

たづねゆく道しらずとも遠近のたづきは花のいろにまかせむ

花を

山ざくらさかりになれば枝かはす松のときはも見えぬ春かな

山櫻ひと木なりともやどしめてしづかに花は散るまでも見む

落花をよませ給うける

憂しと見てとまる習のあらばこそ散るをもわきて花を恨みめ

御前に遅櫻を植ゑられ侍りしに歌つからまつるべ

きよし仰せられ侍りしかば法印道我「春風もこのひ

ともとを山櫻君がためとやよきて吹きけむ」とよみ

て奉りけるに御返し

春風にもろき老木の山ざくらこのひともとをいかでよきけむ

卯花

里つゞき垣根に植ゑむこのごろは卯の花月夜みちもまよはじ

五月雨

五月雨にあなしの河原水こえて檜原も見えずくもるころかな

夏の御歌の中に

夕立はいくさと遠くなりぬらむのこる雲間に見ゆるいなづま

龜山殿千首の歌に女郎花

見ぬ人にかたりやせましをみなへし露のみ落つる野邊の秋風

龜山殿千首の歌に初鴈

白雪のみちゆきぶりのことづては初かりがねにかくる玉づさ

月を

秋ふかき深山がくれの影見えてむかしわすれぬ雲のうへの月

殘菊霜といふことをよませ給うける

秋過ぎてうつろふ色を見せじとやいまさら霜のおけるしら菊

寄嵐雪といへる心をよませ給うける

吹きすぐるあらしの末はみどりにてまづあらはるゝ峰の白雪

神祇のこゝろを

住吉の松のうれこす風の音はこれもややがてやまとことの葉

〔以上續現葉集〕

春の歌とてよませ給うける

山高み花よりさきの春の色をのどかに見せて立つかすみかな

龜山殿にて七百首の歌講せられけるついでに

橘のにははざりせばほとゝぎすむかしながらの宿も知られじ

龜山殿にて五首の歌講せられけるついでに河曉月

をよませ給うける

大井川やまかげくらき岩間よりすゑにながるゝありあけの月

竹霰を

さゆる夜のねざめの床におとづれて竹の葉そよぎふる霰かな

〔以上藤葉集〕

弘安八年二月北山殿にて御遊のついでに

行く末をなほながき世と契るかなやよひに移る今朝の春日に

位さらせ給ひてのち世の中しろしめされけるに馬

車のたちこみたるを御覽じて

わが住めば淋しくもなし山里も朝まつりごとおこたらずして

〔以上増鏡〕

伏見天皇

春

古集幽情只愛洞中春

おのづからもとめぬ友は山かげにありけるものを花鳥のやど

野草山花又欲春

哀なる野山の草木それだにもたがをしへたる春にかあるらむ

鶯

うぐひすの聲もにほひて聞ゆるは花の中にて鳴けばなるらむ
かすみわたる山べを見てや鶯の我がとき來ぬと谷を出づらむ

霞

かすみわたる遠つ山べの春のくれなにの催すあはれともなき
のどかなるながめや外にまたるらむ春はかすみの九重のうち

夕ぐれの久しくあると覺えつるは霞む春日のながきなりけり

梅

花の中に春をいそぐがうれしきに軒ちかくしも梅の咲きける

柳

打靡くけしきを見れば青柳のいとにし春はくるにぞありける

春雨はみどりの絲に露ぬきてたまやなぎとはうべもいひけり

河邊柳

見るまゝにみどりぞまさるとほつ川岸のやなぎの春雨のくれ

春雨

ゆふぐもり雲にかすみのたちそひていくへかとづる春雨の空

花

もゝしきやはしのひだりの櫻花なれてながむる春もへにけり

櫻花にほひのうちにくはるの人のなさをそめかもつらむ

をりふしは散るしもなほのなさけかな風の梢のゆふぐれの花

あたらよのわが身のはての悲しさよ盛ほどなき花を見るにも

待ちをしみ雲居の花をながめてもあはれ十年の春はすぎにき

櫻花まつとをしむといくたびの春のながめにあはむとかする

陰々花浣月

軒ふかき花のかをりに空とちて木の間わづかにあくる月かけ

對禁庭花言志

雲の上の花はかはらず匂ふともまた見む春はいさ知らぬ身を

思ふ故のなきにしもあらぬ名残をばあはれと思へ雲の上の春

萬葉一句 いなましものを

かく匂ふ花しあらずばやすらはで春の山路はいなましものを

やよひの十日ごろ人々あまた歌よみ侍りし時

おしなべて池のあたりは青み渡り春ふかげなる色になりぬる
さかりなる汀の花のくれのいろを心とゞめてけふぞながむる
ひゞきにほふ霞のうちの入相のこゑも春なるいまのゆふぐれ
花は早さかりすぎたる梢しも今日はなさけとながめなしぬる
かすみはつる夕の空を見るまゝに心にふかきあはれぞにほふ

正安四年世中あらたまりし春花を見て

ことしだにあくまで花にまかせてむ身を徒のはるのいとまを

落花

山ざくら惜しまぬ風の心にはさそひちらすもなさけとや思ふ

春月

あくがるゝ心も人はおもひやらじかすめる月のさよふかき空

歸鴈

それも今ぞわするな鴈のひとつらよ秋風たゝむ夕ぐれのそら

春曙

ほのゝと峰の霞はにほひそめて軒端の花にあけつたふなり

春曉

月影はねざめのとこに残りつゝ花のかをりぞまどをあらそふ

春夕

何となく春の日暮ぞあはれなるかすみのきはに鳥わたりつゝ

晴れはてぬ雨のなごりの雪なれやうすくかすめる夕ぐれ
の山晴れかゝる雨のゆふべに風たちて柳のすゑはつゆこぼるなり

春夜

梅かをり月うすがすむおぼる夜に春のあはれぞ多くこもれる

春野

春の色は霞の末のおくふかみながめこめぬるきさらぎの野邊

春庭

そらは早いゝわかぬまで暮れはてゝ庭にのこれる春雨のおと

春風

ちりぬべき花の心にしたがへば誘ふ風のみのうきにしもなし

歎冬

山吹の花のさかりをまつほどに春の日かずのすぎぬべきかな

春の御歌の中に

うぐみすは時時イとなけども梅が枝に雪ちりかゝる花はつれなし
のどかなる夕のながめ春にしておとせぬ雨のくれぞさびしき
咲きそむる一木の花とみるほどによもの櫻もさかりにぞなる
この雨にふりめぐまれてまたれつる梢の花のあすやひらけむ
よもやまに白雪みてりきのふけふ花のさかりに匂ふなるべし
花の上はなほ色そひて夕ぐれのこずゑの空ぞふかくかすめる
いろくの藤山吹の花ざかりなどしもはるのくれにあふらむ
ひとゝせにたゞ一時の春にだになほさきだゝぬ花ほどぞかなないしき
ひとゝせはみな春ながらすぎなゝむ長閑に花の色を見るべく

山里の花に心をうつしとめてかへらむかたのいそがれぬかな
 花はちり春はかへれどあぢきなき我身は何となるかたもなし
 いづかたに我もと思ふ世の中をうたても春のひとり去るらむ
 うつろひし雲居のやどのさくら花またかはる世の春ぞ程なき
 思ひ出でゝなほこそしのべもろ人の櫻かざしゝ雲のうへの春
 春にかはる心はなしにあしびきの山の霞のたつをしぞおもふ
 いたづらに時しもわかぬ春の雪のすさまじき世に我ぞありふる
 時しらぬ身はふるさとのゆきのうちに春めづらしき鶯のこゑ
 なぞやこの梅てふ花のありそめて色香に人のこゝろのみとる
 うちかすみ時のあはれや今ならむ月としもなきおぼろ夜の春
 うかるべき春のわかれにあはじとてさきだつ花も心ありけり

いづかたの名残かなほもまさるらむ花と春とのおなじ別れは
 うちなびく柳さくららのいろくも春のさかりと見ゆる比かな
 なべて皆みちゆき人のけしきまで花にのみあるきさらぎの比
 思ひおく心のいろもしらぬ人の花をかたみと見ざらむもうし
 かすむ夜の木の間の空はおぼろにて花にかをれる春の月かけ
 春のくれそれも名残を惜しみてや雲もしをれて雨のふるらむ
 しづかなるながめもいとゞ悲しきは春もいまはの夕ぐれの雨
 忘れじなやよひのなけば空すみて月さやかなる春のこよひを
 めぐりあはゞ又もと頼む春なれど知り難き世の我ぞはかなき
 かくて又めぐりあはむも難き世に今宵の春よげに惜しむべし
 今のとも同じなさけのうちにして又めぐりあふ春もやあらむ

命ありて今宵に又もめぐりあはゞ今のなさをいかに忍ばむ
いかなれや常のわかれの春よりも心ほそさのこよひそひぬる
山陰の垣根は春にうとくあれやこそ見しまゝの雪ぞかはらぬ
をちかたの柳のうへに雨はれてまきしづかなる春のやまもと
ともし火の光ふけたる春の夜はおしあくる窓も月ぞかすめる
あけぼのやたゞ霞なる浪の上はまぢかき舟ぞゆきゝをも見る
見えそむる木の間をあくる色にして花にとぢたるまどの東雲

暮春

まちとらむいづくの春を急ぎてか惜しむ所にとまりしもせぬ
ながめしをるやよひの末の雨の中に花も名残と散り亂れつゝ

暮春述志

としとくの別れもおなじ春ならば惜しみなれぬる哀をや思ふ
あはれなり知らで惜まぬ人の世よ春は日数のあればこそあれ
春はせめておなじ時にもなぐさまむ又あはぬ世の人ぞ悲しき
春を惜しむ今宵の友もつひにそれ去りわかるべき限はあらむ
春を惜しむ心にあはれつゝきゝて涙にほひておもふことあり
見ずならむ春までかねて悲しきはこゝろをそむる雲の上の花
岩木までなごりとならぬものもなし別れにむけて春を思へば
まぎれすこし思ひもいれぬ悲しさよさしも逢ひ難き時の情を
花のあとの青葉にかはる色を見ても恨めしみ春やゆくらむ
時をしたひ人を思ふもすべて世に別れてふ事ぞ悲しかりける
春はそれかならずかへる時もあらむ長き別れは人の身ぞうき

形なき春の名残を思ひつけて惜しみしたふぞせめてはかなき
散果て、花はもとより残らぬを名のみ名残の春にぞありける
今いく夜かすみ残れるありあけの月をなごりの春のおほぞら
惜しまれてとまるも何かしるしならむ春てふ色の形なければ

三月盡日言志

春はげにはきたりもさりもせぬ物を何をかたちの今日の別ぞ
別るゝも惜しむもひとつ心よりさまゝになす今日の春かな
おなじ春の後もあるべきものならば何かはけふの別なるべき

三月盡夜述志

日にそへてさてあらまうき世の中にうらやましくも歸る春哉
うらむべき風のつらさをわれになして花ふみちらすやどの鶯

秋

秋立日

今日といへば何のうれへのそふとなみ秋としきくぞ唯に侘しき
色そはむながめよいかに今よりの草木のうへも秋たちぬなり
露をおきて涙ぞしるき今よりのうれへのそでの秋のゆふぐれ

初秋

今よりのましての空よ夕ぐれは秋ならでだにながめしものを

浦初秋

難波がたあしの幾夜もまだへぬに秋たちぬとや風のすゞしき

原初秋

秋にあくるあしたの原の風の音にやがてや露もこぼれそむらむ

初秋夜

たなばたのあふ夜ちかしと天の河そらに涼しき風わたるなり

初秋月

月の色雲のけしきもこのゆふべ秋になりぬと見えそめぬなり

早秋

思ひかぬるもとのうれへに今よりの秋の心をなほやくはへむ

七夕

星あひは雲のよそにて目の前のわかれを人になげくころかな

草花

秋ぞとてさきそむる花は見えながらおのが時まつ庭の萩はら

鴈

このごろのうき世を秋の心しるや雲居の鴈もねをぞともなふ
鳴きてくる雲居の鴈の聲すなり霧はれぬまの今朝のあさけに

鳴

秋風のふきすぎてゆくすゑ見えて野澤の草にしぎたちぬなり

月

身を秋のうれへをうつすよもの色に月もおちてや影の悲しき
浮雲にむかふは早き月かげのはれまのそらはのどかにぞすむ
おきしめる夜さむの露のそでうすみひかりもおもき月の衣手
秋の月はねざめの窓をすぎて□枕におつるかげぞふけぬる
庭くらく傾く月は壁にみちて鳴くきりくすこゑふけにけり
あけやする光をしける庭の月の影としもなくうすくなりゆく

三日月の有明の影になるまでに秋のいく夜をながめきぬらむ
草のつゆ松のあらしもすめる夜の月よりなれる哀とぞおもふ
山の端のいるかた近く見ゆるかなまだゆみはりの宵のまの月
昔とおもひきはむるはてもなしすぎけむそらの秋の夜の月
久方の空てりきよみあきらけき秋の月夜は見れどあかぬかも
軒深き松の葉かげをいでやらでしばしはほかに月ぞさやけき
初秋のうかりし月のおもかげもみとせをかけて又めぐりきぬ
さよもふけ人もしづまる時になりて月は獨ぞすみまさりける
月の庭はふけしづまれる秋の夜に蟋蟀ひとりなきまさるなり

霧

秋のあさけ霧たちまがひふる雨にしられてぬるゝ草の上かな

しばしこそ木末もそれとながめつれ霧になりゆくをちの一村

秋風

さぞなまた露もなみだもさはれぬあはれことしも秋風の袖
いつしかの草木のうへはかくもあらし心ぞたへぬ秋の初かぜ
たへずなる秋の心を風にうけてふるゝ草木もなべてかなしき

秋雨

吹きはらふあらしの庭に音をさせて木の葉にかるき秋の村雨
秋ふかき霧のくもりの朝けよりはれもつゞかぬ雨となりぬる
かれはつる草葉も猶ぞしをれゆくさむき雨ふる秋のくれがた
風まよふ野分のくさのうへあれてよこぎる雨は露もたまらず
きくまゝにくらき雨のみふりそひて人は音せぬ秋の夜のまど

露

むすびかへむ淺茅がつゆの玉くしげふたよあけなば冬の初霜
人の世ぞあはれはかなき草の上の露はきえても又むすびけり

秋日

ちらねどもまだきにさびし夕づく日さすや軒端の木々の秋風

秋曙

かげしげき木々の葉につゆおちて霧ふかき山のあけぼの、空

秋朝

朝明や雨のくもりと見えつるはまだ霧はれぬ空にぞありける
たちさわぎしはしぞ晴れぬ横雲のなごりの山の霧のむらく

秋夕

秋ふかみ尾花がすゑも霜がれぬゆふべの風はものさむくして

秋夜

秋ならであきあはれなるながめかな月かげくもる村雨のそら
くさむらのくらき籬のよひの庭に月まつむしの聲しきりなり

秋階

人はこずはしにしたゝる秋の雨をむなしき床にきゝあかす哉

秋岡

秋風のさむきをかべの柳かげすさまじき世のいろになりぬる

秋書

いくつらぞあけやらぬ空は見えわかで霧にかきけつ鷹の玉章

秋聲

さびしげの秋のみ山の夕ぐれやこずゑにあらし雲にかりがね

秋鐘

かたぶかぬ月のひかりは春ながら鐘のこゑのみあけがたの空

秋窓

いつもわが寐覺の空にめぐりあへな窓に向へる入りがたの月

秋村

秋の雨の晴れゆくすゑに山みえて里あらはるゝ遠のむらく

秋燈

かくてなほかはらぬ影もいつまでぞ我がよふけたる秋の燈火

里秋

はかなくてうき初秋のひとめぐりつゆをそへぬる深草のさと

河秋

ながめやる伏見の田の面すゑこめてあけぼの深き宇治の川霧

岡秋

ちりぬなり岡べの宿のはじ紅葉山の木の葉はそめはてぬまに

浦秋

あま人もねてやあかしの浦づたひ月に夜舟のおとぞきこゆる

寄月秋

すぎゝつる月の秋だにほどもなしまして今よりの行く末の空

みなれぬる月はいつくも秋ながらわが面影やあらずなりなむ

寄枕秋

有明のかたぶくかたの鐘の聲まくらそばだてながめてぞ聞く

寄涙秋

草はつゆ袖はなみだのゆふまぐれ秋にしをれぬ世の色もなし

寄霜秋

かれわたる霜のまがきの秋の草かはるすがたは我ひとりかは

寄浦秋

はるくと雲の浪路のすゑ晴れて月の夜わたる須磨の浦ぶね

秋

ものおもふいつもの空の雲風も秋なるくれのいろを添ふなり
鹿のこゑ蟲のうらみもうれへまたる秋にし心ひとりたへめや
風の音の秋に吹きたつゆふべより衣手かけてつゆおちぬなり
秋ならぬ心になしてながむともなほ雲かぜのあはれやあらむ

鹿蟲のうれへもからず秋はたゞこゝろよりしてもものぞ悲しき
雲居にはかりがねわたる夕ぐれにむらさめまがふ軒の松かぜ
露のいろ月のひかりも蟲の音も野邊にみちたる秋のさよなか
秋風のたかき岡邊のやなぎかげなびく木ずゑに夕日をぞ見る
かたをかの梢の風にひと葉おちて秋なるくれのひぐらしの聲
秋かぜの木末にひゞく夕ぐれに雲居のかりもこゑあはすなり
かきほなるまぐさが下葉色かれぬ夜さむもよほす秋風のころ
同じ秋の月はかはらずめぐりあへどこぞに變れる哀をぞ思ふ
明けぬやとねざめて聞けば秋の夜のさもまだ深き鐘の音かな
夕やみや月をおそしとながむればたもとにふれて秋風ぞふく
出でそむる月はよそなるひかりにてまだ軒くらき松風のこゑ

しぐれゆく峰のこずゑの色ならで雲は夕日のそむるなりけり
山ざとのまがきの草もうちしをれ霧にしめれるあけぼのゝ色

月明風又冷

はださむみ秋なる風のこよひかな月も身にしむ色にながめて

野月露深

わけてゆく野原やとほくなりぬらし月影おもる露のころもで

愁

よそになく蟲のうらみときくほどに我もうれへの心にぞなる

黄

まはぎ原枯葉まばらに散りすぎてあれたる庭の秋のくれがた

蟲

蟲の聲のかれゆく聞けばおしなべて見ぬ野山までの秋ぞしらるゝ

葛

こぬ人をかきほのまくず恨みかねおのれかれゆく秋のふる里
ふるさとや野邊ひとつなる秋風にくずの葉しろき夕ぐれの庭

櫛

時雨にも風にもわきてもろかれや早くそめちる櫛のみぢ葉

蓬

いたづらにうき身よそぢの秋たけてわが世ふりぬる霜の蓬生
露しろく月しづかにてさ夜ふくるよもぎが庭は秋かぜもなし

浅茅

秋たけてさむきあさぢが露のうへにひかりふけたる有明の月

暮秋

もろこしの山をすぎゆく秋なりとしたふ心のわれおくれめや

暮秋朝

あさなく霜おく庭のさゝの葉の一夜にのこる秋ぞすくなき

暮秋月

秋に見むその面影もいまいく夜よをへてほそきありあけの月

〔以上伏見院御詠草〕

春二十首

長閑なる心にやがて知られけりけふたちかはる春のしるしは
にほひいづる霞のうちの朝づく日のどけき色は春ぞこもれる
ながめやる夕日のやまのうすがすみ霞にすける松のむらだち

夕づく日のどかにかすむ山もとの竹のあなたにうぐひすの聲
もえそむる野邊の若菜の雪まぜにつむ手も寒くこぼる袖かな
山の端のかすみも寒くふる雪に春とはいはじさゆるあらしも
春もまだひとへの梅のしろたへに雪のしたなる色ぞまがへる
くれなるの色ことに咲く梅の花しづやの軒にあまりなるまで
花はまだやなぎの絲のあさみどりくる人あれなこのごろの春
降りけりな音にはたてぬ春雨の見れば草葉のうへぞぬれゆく
山うすき霞のすゑのゆふづく日かたぶく峯をこゆるかりがね
山かぜにかすみも雲もはらはれてみがける月は春としもなし
またれつる花こそすでに近からしこずゑの色の匂ひそめぬる
大空のかすみも色にうつりけりよそまであまる花のかをりを

雲とのみよそより見つる色もみな花にわけなる春のやまぶみ
櫻花あだに散るとて恨みじようき世のうちはかゝらでもまた
山やまあらしの荒あくすぎつる一とほり花のふゞきに空とぢぬなり
花にそめし心をやがてうつすとはいはでもふかし山吹のいろ
うちかすみ春ものふかきあけほのゝ木だかき岸に咲ける藤波
春もはやあはれ幾夜ぞありあけの月かげほそきよこぐもの空

夏十五首

夏ごろもたちかへてしてもわすれぬはわかれし春の花染のそで
忍び音は更けてや聞くと郭公いもねぬ夜半をかさねてぞ待つ
月は今木の間はつかに見えそめて山ほとゝぎす一こゑぞ鳴く
むらさめのはくもりもはてぬひとそゝぎ晴れゆく空になく郭公

虹のたつふもとの雲に雨すぎて露もさながらとるさなへかな
月のもる軒端の風のみとふきに閨のおくまでにほふたちばな
五月雨はしばし絶間と見るほどもになほ雲ふかしをちこちの山
つれとと餘るながめのつくとと暮しかねたる五月雨の頃
楢の葉の高きこずゑに風を聞きていさごに白き月ぞすしき
かくて見むそをだに秋の花のため草のみどりはよし深くとも
月もまだくらき夜川の水のうへに鶉船のかゞり影ぞほのめく
水の上にもえてもきえぬ螢こそ風にうごかぬひかりなりけれ
あらく過ぐる木末の風の一かたへよこぎる雨にいなづまの影
鷺の飛ぶむかひの岸に瀧おちてすしさふかき松のしたみち
大ぬさや麻のゆふしでうちなびきみそぎすしき賀茂の河風

秋二十首

秋はまだその色とだにわかなくになにぞ心にうかぶあはれは
天つ星ゆきあふ夜半はわれさへに心そらなるながめをぞする
袖の露もいかゞくだくる萩の葉にそよやうれへの秋かぜの時
常よりもこゝろうつろふながめかなまだ夜のまゝの露の玉萩
かげよわみうつるとなしの秋の日に鴈がねさむしうす雲の空
さ夜ふかみまぐらの山の松かぜにたぐふを鹿の聲もまぢかし
うけてむかふ心よりこそ悲しけれ忘れてみばや秋もゆふべも
見渡せばはるかにつゞく小山田の色こき方はかりそめにけり
あきかぜはこずゑをはらふ夕ぐれに雲もかゝらぬ山の端の月
嬉しくも月の秋しも長き夜よさてだにあかぬながめと思へば

見るまゝのすがたばかりか月はたゞ心の底にすみけるものを
人は誰か月よりほかのかげも見ずあれていくよの秋のふる里
秋ふかきありあけの月のかげさむしあさぢいろづく初霜の庭
月はまだかげ見えそめぬ草むらの露にみだるゝ蟲のこゑづく
やゝにほふ朝日のかげを峯にこめて霧にきえゆく秋の山の端
衣うつなれもさこそは寒からしあかつきふかき霜におきゐて
うつるなよ霜はおくとも菊の花つぎて咲くべき色しなければ
もずの鳴く山のすそ野の夕づく日いろ見えそむる櫃の一もと
たづね入る山より山のかさなれば紅葉もふかき色ぞ添ひける
秋も今つれてやいぬるゆふぐれのあらしにはやき雲の一むら

冬十五首

かきくらし軒端の空はしぐるればあらしの末に雲ぞ晴れゆく
山風にふるや木の葉のいくもり見ずば時雨にきゝまがへまし
わけてゆくあともすくなき道のべの小笹がうへにこほる朝霜
かれはつる色こそかはれなほ秋のおもかげ残る尾花かるかや
山川や秋のなごりをなほとめてこほりにすける底のみぢ葉
霜か雪かはだれに見ゆる庭のうへにこほれる月の影の寒けさ
浦かぜに雪ふきまぜてなにはがたあれたる波に千鳥鳴くなり
さえわぶる寐覺の床のふかき夜に聞くもさびしき鴛鴦の一聲
竹の葉にあらしもさやぐゆふぐれの雲のゆくてに霰ちるなり
夜すがらの嵐のまゝのあとなれやむらくうすき今朝の初雪
ふりつもる雪のこのまの朝づく日花にかをりし春のおもかけ

降りはてゝ雲はむらくこほる夜の月にみがけるゆきの遠山
みかりする交野の原のおち草はかくるゝほどにつもるしら雪
炭竈のけぶりは下になびきつゝ雪ふきかくるをのゝやまかせ
暮れてゆく年は我身にそふものを思へば果のあはれなるかな

戀二十首

吹く風のつてにもいかで知らせましかゝる思のありとばかりも
さてもその時間やいつぞあまぐものみだれたちぬる戀も恨も
人しれぬ心ひとつのおもひより胸にけぶりのたゝぬまもなし
もらすなよなみだの露はしげくとも人をしのだの森の言の葉
越えてこそなほまどはるれ逢坂の關のあなたを何なげきけむ
今よりのとだえよまして宇治橋のながき契もたのむとや思ふ

あま人の玉藻かりほす袖の浦にわれたちぬれぬ浪のよるく
きぬぐに泣きぬらしつる衣手に露わけそふる路のさゝはら
祈りこししるしや何ぞ日にそへてつらさのみこそ三輪の神杉
鳩鳥のしたのかよひぢ絶えざらば波の浮巢はうかれたつとも
ひとりのみ臥猪のかるもかきつくしおもふ思にあけがたき床
頼めねば待つともなしの夕暮にすがくやいかにさゝがにの絲
向はましあはれならまします鏡見なれし人のかげのとまらば
たのめつる暮を待つまの床のうへにぬれて残れるつげのを枕
まちたへてはらはぬ床のすが筵なみだの下によし朽ちもせよ
ながれいづる涙にそまる紅のやしほのころもあさしとは見じ
下紐のとけてもとけぬ心こそありしよりなほむすほゝれけれ

忘れじの契もいまさいやしらまゆみわが引く方にたのむばかりか
わが方はおもはぬ波にとまりすな蘆間の小舟さぞさはるらむ
夕ぐれはさてもと思ふあはれよりなみだに匂ふいりあひの鐘

雑十首

山もとの鳥の初音もほのぐとまだ雲ふかきあかつきのそら
かゝげてもほのほみじかき燈のまどにしたゝぬ雨のよすがら
波しろき浦わの松の葉ごしよりかくれあらはれ見ゆるつり舟
うきふしもよしや世の中いくほどとなぐさめて見る庭の吳竹
鳥かへるふもとの林日はくれてのきばの山にやどるしらくも
秋はつるたづらの庵はかたはよりひた引き捨てゝもる人もなし
おほかたもいづくか假の宿ならぬ旅とてなにかさのみ悲しき

入りかゝる日かげは山のはつかにて里のつゞきに煙たつ見ゆ
猶すべてくるしいとはしいくほどの命まつまのまとは思へど
君が代は千年の松のいくたびを植ゑてもつきじもゝしきの庭

〔以上伏見院御百首〕

月前露

袖をうすみ露おきとほす心地して月も身にしむあかつきの床

暮天鴈

越路より雲のいくへをわけすぎて都は暮れぬあまつかりがね

野暮秋

野邊みればちかくいぬべき秋なれや干草の末も色さめぬらむ

寄涙待戀

頼む下のこゝろやよわるまつ程もやゝ過ぎぬがに泪そぼふる

寄夢絶戀

おのづから思はぬ夢に入り來とも面影たえてたどりもやすらむ

〔以上正應二年三十番歌合〕

春日

暮れがたき春日をながみつくくとよもの山邊の霞をぞ見る

夏岡

夏の日にすゞみすらしも旅人のあまた立ちよる岡のまつかけ

夏杜

ゆふだちの晴れゆく雲の追風にまだあめ落つる森のしたかけ

秋雲

うきてわたる夕の秋のむら雲につばさをかはず天つかりがね

秋雨

吹きさわぐ萩の上葉の風まぜにまばらに落つる秋のむらさめ

冬里

きのふけふ外山の雪げ風あれてさむくしぐるゝしがらきの里

戀船

浦がくれ入江にすつるわれぶねのわれぞくだけて人は戀しき

雑鐘

おほかたの夕にこもる世のいろのあはれに匂ふいりあひの鐘

春曙

〔以上永仁五年當座歌合〕

玉葉集題「寄船戀」に作る、

そことなき花のかをりにかすまれて春ものふかき宿のあけぼの

春夕

あはれをばあすに残さぬ暮なれや春つくる日のいりあひの空

春夜

つくづく見ぬ空までもかなしきはひとり聞く夜の軒の春雨

戀形見

夕ぐれの空をかたみとむかへども戀しき人のおもかげもなし

戀命

いくたびの命に向ふなげきしてうきはて知らぬ世を盡すらむ

〔以上正安元年五種歌合〕

春風

藤葉集第三句
「あかぬまの」
に作る、

明日やいかに今日のながめもあらぬよの夕の花に風たちぬなり
夏雨

みどりそふ庭のこずゑの色きよみ夕ぐれすゞし池のうへの雨

秋露

われもかなし草木も心いたむらし秋かぜふれて露くたくころ

冬雲

山あらしの杉の葉はらふあけぼのにむらくなびく雪の白雲

戀夕

たへずならむ身をさへかけて悲しきはつらさを限る今の夕暮

〔以上乾元二年四月二十九日仙洞五十番歌合〕

夏夜

更けぬるかくらきみぎりの水のおとに枕すゞしきうたゝねの床

絶戀

憂きにたへてあれども人のゆるしがほに戀ひて聞かれむ身さへはづかし

庭松

ゆふぐれの松に吹きたつ山風に軒端くもらぬむらさめのこゑ

〔以上乾元二年五月四日歌合〕

玉葉集第五句
「むらさめの
空」に作る、

寄花春

猶もこのうき世の色ぞ捨てがたき花のなさけの春になれても

寄月戀

恨めしくつれなの月や泣きうれへ戀ひかこてども同じ影なる

寄雲雜

うきてふる身のはかなさも悲しきはたゞ目のまへの夕暮の雲

〔以上嘉元三年三月歌色〕

春

霞むてふ姿は見えず世の色のどけき空の名にこそありけれ
はなやいかに春日うらゝに世はなりて山の霞に鳥のこゑとく
うき世にはよしなき梅のほひかな色に心をとめじと思ふに
あかしかぬる寐覺のおもひつきもせずたゞ秋の夜の閨の春雨
しられずもこゝろの底や春になる時なると花の待たるゝ
末たるゝ柳のいとをつたふ雨のしづくもながき春の日ぐらし
山櫻さかりのうちにくつさばやまつはひさしきあたら日敷を
花をながめ鶯の音を聞きなしてことおもひなき春の日ぐらし

玉葉集第一句
「花よいか」
に作る、
新拾遺集下句
「色に心はそ
めじと思ふ
に」に作る、

雨をやむ木末にあらき夕あらししづくも花もともに落つなり
とまれかし春こそかぎりありとても花は日敷を定めやはする

夏

をしや猶さくら山吹散りしをれ春なりぬべき今日のけしきを
今とまつゆふぐれごとのあらましに聞かでなれぬる郭公かな
くれぬかや思ふながめのさながらにゆふべ淋しき五月雨の空
月や出づる星のひかりのかくるかなすゞしき風の夕やみの空
一かたに木々のこずゑを吹きかへし夕立おくる風ぞすゞしき

秋

なびきかへり花のすゑより露ちりて萩の葉しろし庭の秋かぜ
萩のうへ尾花がすゑもしづかにて秋かぜ見えぬゆふぐれの庭

玉葉集詞書
「四月一日頃
雨ふりて花ど
もの散りみだ
れけるを御覽
じてよませ給
うける」に作
る、
玉葉集詞書
「三首の歌講
せられ侍りし
時待郭公」第
一句「鳴きぬ
べき」に作る、
風雅集第三句
「かはるか」
に作る、
藤葉集第二句
「木々の木の
葉を」に作る、
玉葉集詞書
「三十首の歌
合によませさ
せ給ひし時草
花露を」第四
句「萩の葉白
き」に作る、

玉葉集詞書
「八月十五夜
月の十五首の
歌人々によま
せさせ給うけ
るついでに」
に作る、

藤葉集第二句
「まだ朝あけ
の」に作る、

袖のなみだ草葉の露のゆふまぐれ秋にしをれぬよの色もなし
更けぬともながむる程はおぼえぬに月より西の空ぞすくなき
むかし今ゆく末かけて思ひ出でぬこよひ一夜の月のあはれに
窓しらむ軒端のそらは明けそめてまくらの上にきゆる月かげ
雲になくかりがねさむし長月や木の葉いろづくあきかぜの暮
露ふかきまだ朝かげの草がくれ夜のまの蟲のこゑぞのこれる
染めつくす木末にまじる松の色ひとりさめたる秋の山もと

冬

嵐のみこたへぬ枝に吹きすぎて木の葉のあとの山ぞさびしき
雪も降り水もこほるやあめつちのさむきをうくる心なるらむ
ふりつもるよなくごとくに折れそひて雪にしかる庭の吳竹

うづもるゝ松のしづえやこれならむ岡邊にちかき雪の一むら

戀

いひがたみ心にくだすいくおもひこゑより人に知る道もがな
忍妻まつとしすればあやにくにねぬ人しげみさよぞ更けゆく
人まもとめ書くとしもなき玉章を涙ながらぞおしつゝみぬる
契りしをわすれぬ心そこにあれや頼まぬからにけふの久しき
明けぬなりこりねや心さしもこそまたじと千度思ひつるよを
待ちわぶるその久しさの程よりはまだ宵すぎぬ月ぞうれしき
人のみする面影ならばいかになほ我身にそふも嬉しからまし
あまりいかゞ遠ざかる方になりやせむと暫し頼めば又ぞ悲しき
思ふとて思ひもせばのあらましにはかなやそれに哀そひぬる

玉葉集詞書
「待戀の心を」
に作る、

玉葉集詞書
「寄面影戀と
いふ心をよま
せ給うける」
第三句「いか
ばかり」に作
る、

玉葉集詞書
「十首の歌合に寄月戀といふことをよませ給うける」に作る、

風雅集第一第二句「思ひつらねさも憂かりける」と「第五句」ことわりもなき」に作る、
玉葉集詞書「寄夢戀」に作る、
玉葉集詞書「三十首の歌合めされし時遇不達戀」に作る、

たえずなるげにその際の身とまでもさすがしらでや人のつれなき
夜もすがら戀ひなく袖に月あれど見し面影はかよひしもせず
あす知らぬうき世ばかりを歎かばや命をきはの中とさだめて
うきうらみ戀しきあはれいづかたにまさる思ひと心をぞ見る
しばし唯うくとも人にしたかはで恨みのきける我ぞくやしき
よしや人いかにも憂かれそれによりて更にとかくは思はれぬ物を
思ひつゝさも憂かりけりと思ふ後に又戀しきぞ言の葉もなき
あくがるゝ魂のゆくへに戀しとも思はぬ夢にいりやかぬらむ
變らじと頼むきはまでゆるしける我がはかなさぞ言ひてかひなき
厭ふとも同じ世ばかりゆるさなむありてよそにも思ひやるべく
そのまゝにそはまし見ましいいたづらにをしや哀やよその年月

雑

玉葉集詞書「夜路といふ事を」第二句「すぎゆく宿」に作る、
玉葉集詞書「松風を」第四句「風のきかする」に作る、

ふけぬるかすぎゆく里もしづまりて月の夜路にあふ人もなし
ぬるゝかと立ちやすらへば松蔭や風のきかせる雨にぞありける
越えてこそいくへの峯としられけれ見しはなべてのよその山の端
やむまじき雨のけしきになるならし近き尾上も雲に消えゆく
をちこちの夕日の山の色くれて裾野をわたるうきぐものかけ
雨の音の聞ゆる窓はさよ更けてぬれぬにしめるともし火の影
つくろはぬ岩木をもとのすがたにて宿めづらしき山の奥かな
かざりいふ言葉のうへはまよへどもはつれて人の心をぞ見る
なさけをも知る人なみの藻鹽草かきおくあとの數のみぞそふ
代々たえずつぎて久しくさかえなむ豊あし原の國やすくして

玉葉集詞書「題を探りて人々に歌よませ給うけるに雨中燈といふことを」に作る、
風雅集詞書「六帖の題にて人々に歌よませ給うけるついでに山里」第二句「岩木を庭の」に作る、
玉葉集詞書「寄國祝といふことをよませ給うける」に作る、

以上金玉歌合

子日のこゝろを

春日野の子日の松に契りおかむ神にひかれて千世ふべき身は

初春のこゝろを

春やときかすみやおそき今日もなほ昨日のまゝの嶺のしら雪

位におまし／＼ける時うへのをのこども庭花盛久

といふことをつかりまつりけるついでに

よそよりも散らぬ日かずやかさぬらむわが九重のやどの櫻は

三十首の歌めされしついでに見花

あはれ今は身をいたづらのながめして我世ふりゆく花の下陰

落花の心をよませ給うける

嵐ふく木のもとばかりうづもれてよそにつもらぬ花のしら雪

更衣の心をよませ給うける

たちかふる名残やなほものこるらむ花の香りすきせみの羽衣

夏の御歌の中に

人をわく初音ならじをほとゝぎす我にはなどか猶もつれなき

七夕の心をよませ給うける

秋ごとにとだえもあらじかさゝぎのわたせる橋のながき契は

暮秋のこゝろを

長月のすゑ野の眞葛しもがれてかへらぬ秋をなほうらみつゝ

三十首の歌めされしついでに川水鳥

なつみがは川音たえてこほる夜に山かげさむく鴨ぞなくなる

神祇のこゝろを

石清水にごらじと思ふわがこゝろ人こそ知らね神はうくらむ
寄弓戀といへるこゝろを

憂き身にはぞいつれなかりける梓弓いかなる方にこゝろひくらむ
戀の御歌の中に

逢ふ事をしらぬ頼みはかひなくて契ばかりに身をやかへてむ
忘れてもとはずもぞなるちぎりおきし暮ぞと人に驚かさばや
つらかりしこゝろの秋もむかしにてわが身に残る葛のうら風
あふことにかへし命のまゝならば人のつらさもまたは歎かじ
見せばやなくだけで思ふなみだともよもしら玉のかゝる袂を
三十首の歌めされしついでに浦千鳥

わが世にはあつめぬ和歌の浦千鳥むなしき名をや跡に残さむ

月前祝の心をよませ給うける

幾千代もかくこそは見めすむ月の影もくもらぬ秋のゆくすゑ

東二條院七十ぢにみたせ給うける時よませたまう
ける

祝ひそむる今日をや千代のはじめとて契る齡の末ぞはるけき

〔以上新後撰集〕

早春霞といふことをよませ給うける

春きぬとおもひなしぬる朝けより空もかすみの色になりゆく

睦月のはじめつかた雨ふる日よませ給うける

長閑にもやがてなりゆくけしきかなきのふの日影けふの春雨

海邊春望といふことを

かすみゆく波路の船もほのかなり松浦が沖のはるのあけぼの
春雨をよませ給うける

山の端も消えていくへの夕霞かすめるはてはあめになりぬる

五十首の御歌の中に春

山ざくらこの夜のまにや咲きぬらし朝けの霞いろにたなびく

春の御歌の中に

わすれずよ御階の花の木の間よりかすみてふけし雲の上の月

題をさぐりて人々歌つかうまつりけるに春路とい

ふことを

道のべや木の下ごとのやすらひに待つらむ花の宿やくれなむ

彌生の末つかたこずゑ青みわたりて雨ふりけるを

御覽じて

春とてや山ほとゝぎす鳴かざらむ青葉の木々のむらさめの宿

雨中三月盡といふことをよませ給うける

飛ぶ鳥のおくりのつばさしをるらし雲路雨なる春のわかれに

三首の歌講ぜられ侍りしとき郭公を

なきぬべき夕ぐれごとのあらましにきかでなれぬる郭公かな

三十首の歌人々にめされしとき遠夕立

風はやみ雲のひとむら峯こえて山見えそむるゆふだちのあと

百首の御歌の中に蓮を

こぼれ落つる池の蓮のしら露はうき葉の玉とまたなりにけり

三首の歌講ぜられ侍りしとき納涼を

ほかにのみ夏をばしるや瀧つ瀬のあたりは秋のむらさめの聲

六月晦日題をさぐりて人々歌つかうまつりけるつ

いでに池邊納涼といふこゝろを

あしの葉に一夜の秋をふきこしてけふよりすゞし池の夕かぜ

秋の御歌の中に

山風にもろき一葉はかつ落ちてこずゑ秋なるひぐらしのこゑ

山家秋夕といふことをよませ給うける

みやこ人いまとひこなむひとり聞く軒端の杉のあきかぜの暮

百首の御歌の中に秋

雲たかきゆふべの空の秋風につらものどかにわたるかりがね

秋風のさむくしなればあさぎりの八重山こえて鴈もきにけり

更けゆけば蟲の聲のみ草にみちて分くる人なき秋の夜の野邊

いなづまを

宵のまのむら雲づたひかげ見えて山の端めぐる秋のいなづま

五十首の御歌の中に夕月

まだくれぬ空の光と見るほどからいにしられて月のかげになりぬる

月夜秋といふことを

露をみがく淺茅が月はしづかにて蟲のこゑのみさ夜ふかき宿

五十番の歌合に時雨をよませ給うける

ゆふぐれの雲とびみだれあれて吹く嵐のうちに時雨をぞきく

冬の御歌の中に雪を

星きよき夜半の薄雪空はれて吹きとほす風をこずゑにぞ聞く

百首の御歌の中に歳暮のこゝろを

年くるゝけふの雪げのうすぐもりあすの霞やさきだちぬらむ

位におまし／＼しとき禁庭花盛久といふ事を人々

つかうまつりしついでに

雲のうへこゝのかさねの宿の春あらしも知らぬ花ぞのどけき

題をさぐりて千首の歌人々によませさせ給うける

ついでに旅のこゝろを

あしびきの山松が根をまくらにてさぬる今宵は家ししのぼる

雨中旅といふことをよませ給うける

とまるべきかたやいづこに有馬山宿なき野邊のゆふぐれの雨

旅泊のこゝろを

舵まくら一夜ならぶる友船もあすのとまりやおのがうらく

海旅

たちかへる月日やいつをまつら船ゆくへも波のちへに隔てゝ

戀の御歌の中に

風の音のきこえて過ぐる夕暮にわびつゝあれどとふ人もなし

あぢきなしありへじすべて浮世かなおもふ心に人はかなはず

あればある命もさすがかぎりあれやまた一きはの思そふころ

生きて世にありとばかりはきかるとも戀忍ぶとは誰か傳へむ

なれし世の名残もさすがありけむと忍ばれそめし頃も戀しき

待戀のこゝろを

暮し難きけふのながめの心にてまたぬ幾日をいかですぎけむ

さのみやとけふの頼みに思ひなせば昨日のうさぞ今は嬉しき
今宵とへやのちの幾夜はいくたびもよし偽にならばなるとも

雨夜戀といふことをあまたよませ給うける中に

夜の雨の音にたぐへる君なれや降りしまさればわが戀まさる

戀の十首の御歌の中に

人は知らじ心の底のあはれのみなぐさめがたくなりまさる頃

題をさぐりて三百首の歌人々つかうまつりけるに

秋戀を

いづくにも秋のねざめの夜寒ならば戀しき人もたれか戀しき

恨戀のこゝろを

我も人も恨みたちぬる中なれば今はさこそとあはれなるかな

思ひとる身にはいまはの恨なるを及ばぬ上のなぐさめもうし

絶戀のこゝろを

こぼれ落ちし人の涙をかきやりて我もしほりし夜半ぞ忘れぬ

百首の御歌の中に戀

涙こぼれ心みだれていはれぬにうらみの底ぞいとゞくるしき

名所の三十首の歌よませ給うける中に吹飯浦

なくくも雲居をこひて年ふりぬわが世ふけひのうらの友鶴

暁のこゝろを

月の入るまくらの山はあけそめて軒端をわたるあかつきの雲
ながき夜のはやあけがたや近からし寐覺の窓に月ぞめぐれる

一溪雲鳥といふことを

雲鳥もかへるゆふべのやまかぜに外面の谷のかげぞ暮れぬる

雑の御歌の中に

しら雲はゆふべの山におりみだれなかば消えゆく峯の杉むら
小夜ふけて宿もる犬のこゑたかし村しづかなる月のをちかた
何しかも思ひみだるゝ露ふかき野邊のをがやのたゞ假の世を

三十首の歌めされしとき山家嵐

山嵐の過ぎぬとおもふに夕ぐれにおくれてさわぐ軒の松が枝
題を探りて人々歌つかうまつりしついでに鷺を

田の面より山もとさしてゆく鷺のちかしと見れば遙にぞ飛ぶ
文を題にてよませ給うける

なさけ見せて残せる文の玉の聲主をとゞむる物にぞありける

する墨の色し見えれば水莖のながれての世のあとをとめゝや

位におましゝける時大納言三位きぬをぬぎ置き

て局へおりにけるが夕立のもりていたくぬれて侍

りければからぎぬの袖におしつけてたまはせける

つゝみけるおもひやなにぞ唐衣世にもるまでの袖のしづくは

位の御時蓮華王院寶藏よりあしたづといふ箏を出

されて年久しくおかせ給へりけるに正安三年の夏

のころ法皇へ奉らせ給ふとて思しめしつゞけさせ

給うける

雲居より年へてなれし葦たづの歸るわかれにねをぞ添へつる
御讓位の日おまへの萩のわづかに咲きそめたるを

折らせ給ひて大納言三位さとに侍りけるにつかは
させ給うける

咲きやらぬ籬の萩の露をおきてわれぞうつろふも、しきの秋
遊義門院かくれさせ給ひてのち後深草院の御忌日
に法華堂へ御幸ありてよませ給うける

こぞまではわけこし友も露ときえてひとりしをる、深草の野邊
たまづさと申すしやうの琴後深草院に侍りけるを
後には永福門院へ奉らせ給ふべきよし申しおかせ
給ひければかくれさせ給ひて後御忌などはて、か
の御琴を奉らせ給ふとて

玉章のその玉の緒のたえしより今はかたみのねにぞなかる、

龜山院うせさせ給ひにしころ去年の秋後深草院う
せさせ給ひしを又程なくあはれなる御事など女房
の中へ申しおくとて前大納言爲兼の許より「ふた
とせの秋のあはれは深草や嵯峨野の露もまた消え
ぬなり」とありけるに御返し

まだほさぬこぞの袂の秋かけて消えそふ露もよそにやは思ふ
夢をよませ給うける

夢はたゞぬる夜の内の現にてさめぬる後の名にこそありけれ
述懐の御歌の中に

いたづらにやすきわが身どはづかしきくるしむ民の心思へば
寄海述懐の心をよませ給うける

伊勢の海の蜃のうけ繩うけがたきこの身を又は沈めずもかな

懷舊のこゝろを

なさけある昔の人はあはれにて見ぬわが友とおもはるゝかな
惜しむべく悲しぶべきは世の中に過ぎて又こぬ月日なりけり

釋教の御歌の中に

さめぬまのまよひのうちの心にて夢うつゝとも何かわくべき

二月十五日涅槃の心をよませ給うける

今日はこれなかばの春の夕霞きえしけぶりのなごりとや見む

〔以上玉葉集〕

春雪をよませ給うける

春とだにまだしら雪のふるさはあらしぞ寒きみよし野の山

禁中盛花といへるこゝろを

さくらばなはやさかりなりもしきの大宮人は今かざすらし

硯のふたに櫻を入れて入道前太政大臣につかはさ

れける

散りまよふおもかげをだに思ひやれたづねぬ宿の花のしら雪

寄風花といへる心をよませ給うける

うつろふも心づからの花ならばさそふあらしをいかゞ恨みむ

春曉月といへることを

月影をかすみにこめて山の端のまだ明けやらぬしのゝめの空

夏の御歌の中に

たのめおく時とはなしに郭公ゆふべはわきてなほまさるらむ

郭公を

つれなさを月にぞかこつほとゝぎす待つにむなしき有明の空
夕卯花を

月と見てよるもやこえむ夕ぐれのまがきの山に咲ける卯の花

秋の御歌の中に

むらさめに桐の葉落つる庭の面のゆふべの秋をとふ人もがな
ふく風のうきになしてやかこたまし夕はまさる秋のあはれを

擣衣驚夢といへるこゝろを

おどろかすきぬたの音に小夜衣かへすほどなきうたゝねの夢
暮秋菊といへるこゝろを

霜ふかくうつろひゆくを秋の色のかぎりと見するしら菊の花

河月といへるこゝろを

五十鈴川たえぬながれの底きよみ神代かはらずすめる月かけ

戀の御歌の中に

せめてたゞ僞とだにおもはゞや頼めてふくる夜半のつらさを

龜山院かくれさせ給ひて後昭訓門院御ぐしおろさ

せ給うけるととき入道前太政大臣のもとにつかはさ
れける

今日かはる袖の色にも露きえじあはれや更におきどころなき

竹鶯を

玉敷の庭のくれたけいく千代もかはらぬ春のうぐひすのこゑ

圓光院入道前關白弘安八年四月さらに太政大臣に

なりて侍りける時藤の花につけてつかはされける
 時すぎて更に花さく藤なみのたち榮えゆくけふいまにもあるかな
 正應二年前右大臣家基關白の詔かうぶりて五月五
 日薬玉にそへていつかとして待ちし菖蒲も今よりぞ
 君が千年をかけてつかへむと奏し侍りけるに御か
 へし

菖蒲草ひきくらべても仕ふべきためしはながき世にや残らむ

〔以上續千載集〕

初見花といへる心をよませ給うける

咲きそむる外山の花のいろ見えてまどほにかゝる嶺のしら雲
 みこの宮と申しけるととき花の歌とてよませたまう

ける

木のもとにながめなれても年ふりぬ春のみやまの花のしら雪

月出山といふことを

雲はらふあらしのそらはみね晴れて松のかげなる山の端の月

叢端蟲怨といへることを

草の原つゆのよすがに鳴く蟲のうらみやなぞと誰にとはまし

秋の御歌の中に

秋風の音羽のさともみぢ葉にしぐれふりそふ冬は來にけり

冬の御歌の中に

霜さむき難波のあしの冬がれに風もたまらぬこやの八重ぶき

寄水戀といふことを

いかにせむむすばぬさきに山川のくみて知らるゝあさき契を

寄關戀の心をよませ給うける

逢坂やたがためかよふ關路とて我身よそなる名をとゞむらむ

戀の御歌の中に

あふことも知らぬたのみのはかなきはくらせる宵の夢の通路
あだにのみうつるはやすき月草の色こそ人のこゝろなりけれ

雑の御歌の中に

袖ぬらす涙に似たる時雨こそわが身世にふるたぐひなりけれ

幽徑苔を

いかにして思ひ入りけむ山ふかみあとなき庭の苔のかよひぢ

寄船述懷を

浮き沈み世をうみわたる蟹舟の行末しらぬ身にこそありけれ

〔以上續後拾遺集〕

初春のこゝろをよませ給うける

かすみたち氷もとけぬあめつちのこゝろも春をおしてうくれれば

春の歌あまたよませ給うける中に早春を

春べとは思ふものから風まぜにみ雪散る日はいともさむけし

早春柳といふことをよませ給うける

春の色は柳のうへに見えそめてかすむものから空ぞさむけき

梅をよませ給うける

道のべや竹吹くかぜのさむけきに春をませたる梅が香ぞする

五十首の御歌の中に柳を

いつはともこゝろに時はわかなくに遠のやなぎの春になる色

花の御歌の中に

枝もなく咲きかさなれる花の色に木末もおもき春のあけぼの

春の御歌の中に

夕ぐれのかすみのきはに飛ぶ鳥のつばさも春の色にのどけき
花の上の暮れゆく空にひゞき来て聲にいろあるいりあひの鐘
小夜ふかく月はかすみて水落つる木蔭の池にかはづ鳴くなり
哀にもおのれうけてやかすむらむ誰がなす時の春ならなくに

持明院に移り住ませ給ひて花の木どもあまた植ゑ

そへられて三歳ばかりの後花咲きたるを御覧じて

植ゑわたすわが世の花も春は経ぬまして古木の昔をぞおもふ

花のころ北山に御幸あるべかりけるをとゞまらせ

給ひて次の日つかはさせ給うける

たのめこしきのふの櫻ふりぬともとはゞや明日の雪の木の本

暮春のこゝろを

かすみ渡るとほつ山邊の春の暮何のもよほすあはれともなき

五十首の御歌の中に夏草

夏草のことしげき世にみだされてこゝろの末は道もとほらず

夏の御歌の中に

ほとゝぎす名残しばしのながめより鳴きつる峯は雲あけぬなり
すゞみつるあまたの宿もしづまりて夜ふけて白き道のべの月
鳴く聲もたかきこずゑの蟬の羽のうすき日影に秋ぞちかづく

萩風を

こゝにのみあはれやとまる萩風の萩のうへこすゆふぐれの宿
百首の御歌の中に萩

朝ぼらけ霧のはれまのたえくゝにいくつら過ぎぬ天つ鴈がね
萩の御歌の中に

庭の面にゆふべの風はふきみちてたかきすゝきの末ぞ亂るゝ
見わたせばすそ野の尾花ふきしきて夕暮はげし山おろしの風
萩かぜは遠き草葉をわたるなり夕日のかげは野邊はるかにて
庭ふかきやなぎの枯葉ちりみちてかきほあれたる萩風のやど
うちむれてあま飛ぶ鴈のつばさまで夕にむかふ色ぞかなしき
にほひしらみ月のちかづく山の端の光によわるいなづまの影

やまかぜも時雨になれる萩の日にころもやうすきをちの旅人

鴈を

つれて飛ぶあまたの翅よこぎりて月の下ゆく夜半のかりがね

八月十五夜伏見に御幸ありて人々に月の歌よませ

させ給うけるついでに

のきちかき松原山のあきかぜにゆふぐれきよく月出でにけり

二品法親王覺助長月の末に長谷の山莊にまかりて

紅葉の枝を折りて奉りけるにこの一枝の残りゆか

しくこそとてたまはせける

いろふかき宿のみぢの一枝にをり知る人のなさけをぞ見る

二年の萩の頃よませ給うける

あだし色に心はそめじやまかせに落つる紅葉の程もなき世に
暮秋蟲を

夕日うすき枯葉の淺茅したすぎてそれかとよわき蟲の一こゑ
落葉深といふことを人々によませさせ給うけるつ
いでに

吹きわくる木の葉の下も木の葉にて庭見せかぬる山おろしの風
冬夕の心をよませ給うける

こずゑには夕嵐ふきてさむき日の雪げの雲にかり鳴きわたる
夕雪

ふりつもる色より月のかげになりてゆふぐれ見えぬ庭の白雪
正應二年十一月二十八日賀茂の臨時の祭の還立待

たせ給ふほど上達部殿上人あまたさぶらひてよも
すがら御歌合などありける朝ぼらけ雪さへ降りて
いとおもしろく侍りけるを同じ五年のおなじ月日
臨時の祭にて雪ふりて侍りければおぼしめし出づ
る事ありて御硯の蓋に雪を入れて淨妙寺關白その
ころこもり居て侍りけるにつかはさせ給うける
めぐりあふ同じ月日は思ひいづや四年ふりにし雪のあけほの
永仁五年五節のまゐりの日龜山院より申させ給へ
る御歌の御かへし
しのぶらし少女が袖の白雪もふりにしあとの今日のおもかげ
冬庭といふことを

おのづから垣根の草もあをむなり霜のしたにも春やちかづく
戀の歌あまたよませ給うける中に

思ひ取り恨みはてゝもかひぞなき頼むれば又待たれのみして

戀海といふことを

伊勢の海なぎさに拾ふたまゝも袖ほすまなき物をこそ思へ

戀命を

厭ふしもかこち顔にや思ひなさむつれなしとだにかけし命を

恨戀のこゝろを

ためしなくつらき限やこのきはと思ひし上の憂きもありけり

戀の御歌の中に

とはずなる今ライよりかくや隔てゆかむ今宵ばかりはさてあかずとも

かはりゆくきのふの哀けふのうらみ人に心のさだめなの世や
涙だにおもふが程はこぼれぬとあまりくだくる今のこゝろに
思ひくゝ涙とまでになりぬるをあさくも人のなぐさむるかな
それをだに思ひさまさじ戀しさのすゝむまゝなる夕ぐれの空
いとゞこそ頼みどころもなくならめ憂きには暫し思ひ定めじ
思ふ人今宵の月をいかに見るや常にしもあらぬ色にかなしき
このくれにわが戀ひをれば寒き鴈なきつゝゆくは妹がりか行く
憂き事をいかでなべては思ひなさむ嬉しくとても幾程のよに
鳥のゆく夕の空よその夜にはわれもいそぎしかたはさだめき
猶も世にあるやとかくる人傳よりき身の憂きを更に知れとや
面影のとまるなごりよそれだにも人のゆるせる形見ならぬを

思ひくだすうさも哀も幾かへり世はあらぬ世の身は元の身に
伏見にて人々題をさぐりて歌つかうまつりけるつ
いでに水郷

伏見山荒田のおものすゑ晴れてかすまぬしもぞ春のゆふぐれ
春の述懐のこゝろを

花鳥のなさはけはうへのすさびにてこゝろの内の春ぞものうき
寄花述懐のこゝろを

時すぎしふる木のさくら今は世に待つべき花の春もたのまず
田家のこゝろを

はるかなる門田のすゑは山たえて稻葉にかゝる入日をぞ見る
月の十五首の歌人々によませさせたまうけるに雑

月を

あはれさても何のすさびの詠めして我世の月の影ふけぬらむ
題をさぐりて人々歌つかうまつりけるに關といふ
ことをよませ給うける

逢坂やあかつきかけて鳴く鳥のこゑしろくなる關のすぎむら
夕鐘を

鐘の音をひとつあらしに吹きこめてゆふぐれしをる軒の松風
ならびたつ松の面はしづかにてあらしのおくに鐘ひやくなり
山の端のながめにあたるゆふぐれに聞かできこゆる入相の音
雑の御歌の中に

寺ふかきねざめの山は明けもせで雨夜の鐘のこゑぞしめれる

夜の雨に心はなりておもひやる千里のねざめこゝにかなしも
浦かぜはみなとの蘆に吹きしをり夕ぐれしろき波のうへの雨
天つ空てる日のしたにありながらくもる心のくまをもためや
うれへなく樂みもなしわが心いとなまぬ世はあるにまかせて
夕松といふことを

今しもはあらしにまさるあはれかな音せぬ松のゆふぐれの山
鷺を

山もとの田の面より立つ白鷺のゆくかた見れば森のひとむら
山家夕といふことを

山かげやちかきいりあひの聲くれて外面の谷にしづむしら雲
山家の御歌の中に

をちかたの山は夕日のかげ晴れて軒端のくもは雨おとすなり

山家鳥

山かげや竹のあなたに入日落ちてはやしの鳥の聲ぞあらせふ
後深草院かくれ給ひての又の年の春遊義門院の御
かたより梅の花を折りて奉らせ給ふとて「ふるさと
の軒端に匂ふ花だにもものうき色にさきすさびつ
つ」とありけるに御返し

花はなほ春をもわくや時しらぬ身のみものうき頃のながめを
秋のはじめつかた近くさぶらひたる人の身まかり
ければ

彦星の逢ふてふ秋はうたてわれ人にわかるゝ時にぞありける

室町院かくれ給ひてのち持明院に御幸ありて紅葉
を御覽じてよませ給うける

心とめしかたみの色もあはれなり人はふりにし宿のもみぢ葉

遊義門院かくれ給ひにける秋鴈の鳴くを聞かせ給

ひて

おくれてもかついつまでと身をぞ思ふ列に別るゝ秋の鴈がね

後深草院かくれ給ひての年神無月のはじめつ方圓

光院入道前關白の許より文を奉るとて冬にも程な

くなりぬことに思ひとがめらるゝよし申して侍り

ける御返事のついでに

おもへたゝ露の秋よりしをれきて時雨にかゝる袖のなみだを

後深草院かくれ給ひて又の年の二月ばかり雨ふり

けるに覺助法親王の許にたまはせける

露けさはきのふのまゝのなみだにて秋をかけたるそでの春雨

後深草院七月にかくれ給ひての又の年の九月龜山

院うせ給ひにければ

消えつゞきおくれぬ秋のあはれしらば先だつ苔の下や露けき

百首の御歌の中に釋教

ふかく染めし心の匂すてかねぬまどひのまへの色とみながら

(以上風雅集)

百首の歌よませ給うける中に澤若菜

春あさきゆきげの水にそで濡れて澤田の若菜けふぞ摘みつる

花園院位におはしましけるとき朝覲行幸の儀を御
覽せさせおはしましてよませ給うける

春にあふ老木の櫻ふりぬればあまたかさなるみゆきをぞ見る
春の御歌の中に

志賀の浦やよせくる波もしろたへに花ふきおるす比良の山風
うへのをのこども三首の歌つかうまつりけるついでに
照射をよませ給うける

ともしする端山のほぐしよもすがらもゆるや鹿の思なるらむ
樹陰夏月といふことをよませ給うける

久方の雲のいづくのかげならで木の間わけゆくみじか夜の月
夏の御歌の中に

まだきより波のしがらみかけてけりみそぎ待つ間の賀茂の河風

月の十首の歌よませ給うける中に雲間待月といふ
ことをよませ給うける

吹きはらふ嵐も月もまたれけりつらきへだてのむらくもの空

秋の御歌の中に

ほさでこそ見るべかりけれ須磨の蟹の汐たれわぶる袖の月影
古き歌の詞にて歌よませ給うけるとき「咲きにほふ
らむ」といふことを

いまよりや咲きにほふらむ小男鹿のこゑきく小野の秋萩の花
蟲聲欲枯といへる心をよませ給うける

初霜のをかべの眞葛うらみかねおのれかれゆく蟲のこゑかな

弘安七年九月九日龜山院にて籬菊露芳といへるこ
とを講ぜられけるにいまだみこの宮と申しける時
奉らせ給うける

咲きにほふ菊のまがきの夕かぜに花の香やどす袖のしらつゆ
三十首の歌よませ給うける中に秋

さそひゆく佐保山あらし待てしばしは、その紅葉秋ふかき比
冬の御歌の中に

けさの朝け寒きあらしの山おろしに初霜ふりぬ野邊の淺茅生
「待つとしきかば」といふ詞をよませ給うけるに
みやこ人まつとしきかばことづてよひとりいなばの峰の嵐に
うへのをのこども題をさぐりて歌つかうまつりけ

るついでに本末といへることをよませ給うける

迷ひそめし心の末にひかれ来て本のさとりにかへりかねぬる

冬神祇といへることをよませ給うける

天の戸のあけしむかしをうつし来て神代にかへす朝倉のこゑ

初戀の心をよませ給うける

知られじなよその浦路をこぐ船のほの見し浪を袖にかくとは

戀の御歌の中に

かゝりけるむくいぞつらき逢ふ事のなきがきイを契に思ひなしても
せめてたゞ消えぬとだにも知らせばや下の思ひにくゆる煙を
たちまがふかたこそなけれ富士のねや絶えぬ思にくゆる煙は
つらしともうらみしまでの夕ぐれは思ひよわらぬ昔なりけり

人々題をさぐりて歌つかうまつりけるとき長短と

いふことをよませ給うける

あぢきなく一夜の夢のちぎりゆゑさめぬ思の世をやつくさむ

寄橋戀のこゝろを

面影は見しをかぎりのとだえにて逢ふ夜むなしきゆめの浮橋

萬葉集の詞にてよませ給うける御歌の中に「たづわ

たる見ゆ」といふことを

海原や沖こぎくればゆふしほのひがたの浦にたづわたる見ゆ

雑の御歌の中に

世をすくふ心のうちのなほざりに民のうれへをなすぞ悲しき

後深草院かくれさせ給うけるころ深草へ御幸はべ

りけるに霧のふかく立ちて侍りければ

消えはてしけぶりのすゑのおもかげも立ちそふ霧の深草の山

弘安八年三月従一位貞子に九十の賀給はせけるに

いまだみこの宮と申しける時よませ給うける

かぎりなき齡はいまだ九十路なほ千代とほき春にもあるかな

〔以上新千載集〕

春の御歌の中に

ふるさとの軒端の梅よ幾春のこゝろを染むるつまとなりけむ

我はいさなれも知らじな春の鴈かへりあふべき秋のたのみは

なれて見し雲居の花も世々ふりておもかげ霞むこゝのへの春

名所の三十首の御歌の中に信太杜

ゆふだちの名残ひさしきしづくかなしのだの杜の千枝の下露

秋の御歌の中に

露ふかきまだ朝あけの草がくれ夜の間の蟲のこゑぞのこれる
ふるさとの籬の蟲やうらむらむ野邊のかりねの夜寒なるころ
鴈がねは雲居がくれになきて來ぬ萩のした葉の露さむきころ
思へたゞむなしきはしに雨をおきて明けがたき夜の秋の心を

三十首の歌めしけるついでに秋

秋かぜの聞すさまじく吹くなべに更けて身にしむ床の月かげ
花園院位におまし〜けるとき十月ばかり持明院
殿へ行幸あるべかりける前の日紅葉を箱のふたに
入れて奉らせ給うける

色そへむ行幸をぞ待つもみぢ葉もふりぬる宿の庭のけしきに

冬の御歌の中に

浮きてゆく雲のたよりの村時雨ふる程もなくかつ晴れにけり
嘉元元年三十首の歌めしけるついでに夜神樂とい
へることをよませ給うける

星うたふこゑや雲居にすみぬらむ空にもやがて影のさやけき

鞆中野といふことをよませ給うける

露ふかき野邊の小笹のかりまくら臥しなれぬ夜は夢も結ばず

旅の御歌の中に

松が根のあらしのまくら夢たえてねざめの山に月ぞかたぶく
寄布戀といふことをよませたまうける

世とともに胸あひがたき我が戀のたぐひもつらき今日の細布
戀の御歌の中に

おのづから又逢ふ契ありとてもなれしならのよには歸らじ
うかるべき身を知る上の戀しさは何にかしはし思ひしづめむ
三十首の歌めしけるついでに社頭祝を

石清水ながれのすゑをうけつぎて絶えずぞすまむ萬代までに
神祇の御歌の中に

神や知る世の爲とてぞ身をも思ふ身の爲にして世をば祈らず
竹林院入道左大臣いまだ右大將に侍りけるころ御
製をあまたあそばしてたまはせける奥に
かきとむるこの水莖のかはらずばなからむ跡の形見とも見よ

〔以上新拾遺集〕

梅夕薫のこゝろをよませ給うける

木の間よりうつる夕日のかげながら袖にぞあまる梅のした風

霞間花といふことをよませ給うける

櫻花さけるやいづこみよし野のよし野の山はかすみこめつゝ

曉庭落花といふことを

こずゑには花もたまらず庭の面のさくらにうすき有明のかげ
霞間月をよませ給うける

木の間もる影ともいはじ夜半の月かすむもおなじ心づくしを
月前風といふことをよませ給うける

むら雲も山の端とほくなりはてゝ月にのみ吹く峯のまつかぜ

あらし吹く峰の浮雲さはれてこゝろもそらに澄める月かげ

月前露をよませ給うける

更けぬるか露のやどりも夜さむにて淺茅が月に秋かぜぞ吹く

山路月を

たれにまた月より外はうれへましなれぬ山路の秋のこゝろを

秋の御歌の中に

ゆく秋の末葉の淺茅つゆばかりなほかげとむるありあけの月

寄草戀を

色かはるこゝろの秋の葛かづらうらみをかけて露ぞこぼるゝ

人を恨みむといふ言葉をよませ給うける

つらしとて人を恨みむことわりのなきに憂身の程ぞ知らるゝ

後深草院の御事おぼしめし出で、七月十六日月の

あかゝりけるによませ給うける

かぞふれば十年あまりの秋なれどおもかげ近き月ぞかなしき

(以上新後拾遺集)

百首の御歌の中に池藤

春ふかき色にぞうつるむらさきの藤さくやどの池のさゝなみ

百首の御歌の中に淺茅露

ふるさとや荒れゆく庭の淺茅原露ふかしとてたれかはらはむ

百首の御歌の中に湊千鳥

波さわぐなごのみなどの浦かぜに入江の千鳥むれてたつなり

百首の御歌の中に歳暮

いそぐべき春のこゝろも知らぬ身はのどかに送る年の暮かな

〔以上新編古今集〕

花の御歌の中に

匂へどもそこもしらぬみ山べに花のしるべの風ぞうれしき

位におまし／＼ける時うへのをのこども三首の歌

つかうまつりけるついでに暮春月といへることを

ゆく春のなごりをさへはそへしはや月だにあるを有明のころ

立秋のこゝろをよませ給うける

秋といへばやがて身にしむけしきかな思入りても風は吹かじを

永仁元年八月十五夜十首の歌の中に秋夕の心をよ

ませ給うける

物ごとにあはれすゝむる夕暮の秋のけしきにながめわびぬる

永仁元年八月十五夜十首の歌に秋浦といふことを

よませ給うける

藻鹽やくけぶりひとつに立ちそひてよそよりふかき浦の秋霧

〔以上藤葉集〕

正應元年六月永福門院入内のをり

雲の上に千代をめぐらむ始とてけふの日影もかくやひさしき

永仁六年春宮に御位譲り給ひての冬五節のころ去

年をおぼしいでゝその折に關白にて侍りし兼忠の

おとゞに櫛つかはすとて

少女子がさすや小櫛のそのかみにともになれこし時ぞ忘れぬ

正和二年長月のくれつかた賀茂に忍びて御こもりの程つごもりがたの空のけしきいとものははれなるに

長月や木の葉もいまだつれなきにしぐれぬ袖の色やかはらむ我身こそあらずなるとも秋のくれ惜名残イしむ心はいつもかはらじ

〔以上増鏡〕

正安二年二月二十七日、日吉社にまうでさせ給ひ夜に入りて御神樂おこなはせ給ひてのち御うたあまた侍りける中に

我世をや神も心に待ちつらむわきて手向くるなゝのゆふしで嘉元二年の秋後深草院かくれさせ給ひしに又の年

の秋に龜山院もむなしくならせ給ひにければうちつゞきかなしき御ながめしてわたらせ給ひけるにうきはたゞこども今年も秋ぞとよ嵯峨野のあらし深草のつゆ

〔以上日吉社並叡山行幸記〕

歴代御製集卷九終

歴代御製集卷十

後伏見天皇

歲中立春

年をこめて春はきぬなり今やはも世もやはらげる時にしならむ

立春

ゆきかへるまたあらたまの春きぬと思ふにやがて立つ霞かな

早春

けふし降る初春雨にうるほひて花もはやくや咲かむとすらむ

早春雨

當座歌合

草木みな春のこゝろをうけぬらし時なる雨のふりしうるへば

早春霞

春にこそ世はなりぬらめ時わかぬながめの空もまた霞むなり

雪中鶯

雪さむき垣根の竹のうへにしも春ときこゆるうぐひすのこゑ

鶯

うぐひすのまだ春わかき初聲に花かすみまでの色ぞこもれる
鶯のまづ鳴く今朝のはつこゑぞ春をきかするはじめなりける

霞

をちかたや霞の色のくれそひてながめのすゑは山もわかれず
遠山のあけはなれゆくしのゝめにふもとにしづむ霞をぞ見る
むつきよりやよひのすゑの空までの春にわたるは霞なりけり

見るまゝに外山の峰のきえゆくは霞のふかくなるにやあらむ
霞のみいつもかはらぬ色にあれや草木は春のすゑも見ゆるを

柳

谷ごしのむかひのきしの川柳こずゑぞなみの□にひたれる

春雨

水の面のあやおるけさの春雨に花のにしきもほころびやせむ
春雨のふるきやなぎのあさみどりわづかに時の色ぞ見えける
つくづくとのどけき宿の雨のうち人こそ見えね春はくれども
花鳥も見えずきこえぬ雨の中のながめの春にもぞわびしき

遠樹

雨になるながめのすゑにきえはてぬ霞の下の木々のひとむら

花

夜の雨けふの風にやさくら花なべてあまねく咲きすゝむらむ
いとまある春をのどけみもゝしきや櫻かざしゝ昔をぞおもふ
春の時となりぬと思へばまだ咲かぬ花も心にかゝるなりけり
きのふけふ花や咲くらむよしの山かゝれる雲の色に見えゆく
咲きやすると待ちつゝあれば櫻花けさふる雨にほころびにけり
たちこむる雲も霞も花の色のひとつにほひになれるあけ際の
あけしらむ外山の雲のほのどと花になりゆく薫りをぞ見る
よしやたゞ軒の一木のさくら花ほかの木末にこゝろうつさじ
たぐひなき花のにほひに大かたの春さへ時のなさけとぞなる
ながめこし雲居の櫻としふりて我が身ものうき春ぞへにける

何と慕ひいかに惜しまむやま櫻ちるをならひの春のくれがた
春はなほ日数もあるをさくら花うたてのこりの色もとゞめぬ

夕花

風のおと花のかをりもひとつにてのどかにひやく入相のかね

山花

きさらぎや花さく山をわきてこそかすみも春の色に立ちけれ

春日

くれがたき春日を永みつくくとよもの山べの霞むをぞ見る

春月

月かげも花の木ずゑにかをりあひてなべて朧の春のおほぞら

春朝

咲きまさる夜のまの花のあさぼらけ今日の盛を誰に見せまし

春夕

夕ぐれや山邊のどかにかすむ日の木ずゑに遠きうぐひすの聲
かすみくもり入りぬと見つる夕日影花の上にぞ暫しうつろふ
ながめつるゆふべの空のいろくれておとをのこせる軒の春雨

春木

時にあひて咲くにしあれば柳櫻いろそふ色は春にぞありける

春草

草あをき春のまがきの夕ぐれにこずゑもしらぬ花ぞ散りくる

春里

山吹の花さくころになりぬれば井手の里こそおもひやらるれ

春野

如月やはるけき野邊のあさぼらけ霞める末はいづくともなし

春水

おもかげぞその世の春にかはりぬる花ちりしきし庭のいけ水

春衣

春風はころもでとほし身にしみて雪ちる空はかすむともなし

春情

かくしつゝ年のいくよをすぐとしも覚えぬ春に又ながめしつ

春

をちかたの霞になびく青柳のいとこそはるに世はなりにけれ
昨日けふ春とやそらのかすむらむもの思ふ身は時もしらぬを

いくかすみ戀しきかたを思ひこめぬ彌生の空の春にながめて
むつきたつ今朝初春のあさがすみはやものどけき空の色かな
梅が枝よまづ咲くだにもなさけなるにならぶ花なき匂なるらむ
しづかなる宿のながめの友なれやしづく落ちそふのきの春雨
ゆふぐれは目に見ぬ雨のふりそひてみどりいろそふ庭の若草
霞たちうぐひす鳴きて世の色も春めきわたる比にもあるかな

古木花稀

ふりにけるいくよの春をしたふらむ朽木に咲ける花の一ふさ

遅櫻

風にもるゝ青葉がくれの遅櫻のこるとなしのいろぞさびしき

歎冬

春ふかき青葉の庭のゆふかげに木のした照れるやまぶきの色

藤

岸たかき木ずゑにかゝる藤波はみなそこふかく色ぞうつろふ

暮春

さかりなる軒の一木のおそざくらこれのみ春の色ぞのこれる
花に見し木ずゑのさかりすぎはてゝ庭に春あるつゝじ山ぶき
春とほきなごりとたてゝむかふうち皆その色の哀をぞなす
散るとすれど時ある花は又もさかむ我身ぞしらぬ春は悲しき
すぐとなみやよひも半いたづらに又この春もくれむとすなり
春ふかき池のみぎはの草のなかにおのれさかりと見ゆる山吹
おくれさく花もあれどもなべて世は青葉ぞ時の色になりぬる

暮春雨

花はしをれ青葉は色のまさるかなやよひの末の雨の日ぐらし

暮春有懷

うき世にはとまらじとする色ならば惜むをあだに花や思はむ

別朋

のどかにてあすとも物をたのまめや昨日の人も今日は別れぬ

思歸

わたの原かへる浪にもことづつてむみやこ戀しみ我しをれぬと

村

ありあけの月は木末にかたぶきて鳥なきつゞく里のひとむら

山

みかさ山あふぐ春日もくもりなき心のそこはてらし見るらむ

榮枯

時すぎし古木のさくらいまは世にまつべき花の春もたのまざ

南北

梅の花同じ一木も枝をわけて咲きちる色のことにぞありける

高低

ねにかへり雲に入るてふ花鳥のなごりもいまの春のくれがた

持明院にて

花はまだ咲きとゝのはぬ木末ながら春をさかりの比の宿かな
軒近き八重の櫻のこずゑしもこと木にすらむなさをぞ見る

持明院にうつり居侍りしころ

かげしげき軒端のこずゑ色くれてみやこともなき風の音かな
雨のくれ入相のこゑもしづめるはながめの末に雲やかさなる
やどしめて今こそさらにすみそむれふりにしあとの庭の池水
夏ふかきみぎはの木立ものふりて池にのぞめるかげぞ涼しき
みどりなる木の下しげに露みえてゆふべの雨の色ぞすゞしき
ふりすさむゆふべの池の雨のうちに鳴くや蛙の聲ぞ添ひゆく

伏見にて

伏見山かすむ田のにもなく田鶴の聲のどかなる春の日ぐらし
今しもあれ田の面の暮のさびしきに野飼の牛の歸るをぞ見る

參籠石清水之時當座十首歌

早春

この春はこほりとともに石清水神のこゝろもまづとけぬらむ

霞

たちかへりふたとせわけぬ八幡山かすみへだてしみねの通路

鶯

おのが時いたれる春のしるしとて鳩の峰にもうぐひすぞ鳴く

春雪

神垣やつぎてふりぬるあとなれば春の行幸も代々をかさねぬ

梅

なつかしき神の御垣のあたりしも薫りことなる梅が香ぞする

花

たのもしな神の恵のかれぬゆゑにみ山の花もかくぞひらくる

述懐

世をまもる神の心をかへりみておろかにたらぬ身をぞ恐るゝ

釋教

ひとたびのうたてまどひの心より隔てぬ奥にさはりをぞなす

神祇

そのかたちその草木までまたくして神のところはなほ盛なり

祝

跡たれて神のてらせる日の本の國のかためはひさにつきせじ

五色を四季にわたして當座によみ侍りしに春を

青

つねよりも庭の柳のあさみどりぬれて色そふはるさめのうち

黄

散りはてし櫻にかはる山吹はあらぬいろこそなさけなりけれ

赤

時にあふやよひの園の桃の花けふをりえたるいろに咲くなり

白

おもふかな我もながめの春ふりぬ花はましての宿のむかしを

黒

つれてわたる霞のそらの夕鳥すごきながめは今にぞありける

〔以上後伏見院御製〕

春風

あけわたる霞のをちはほのかにて軒のさくらに風かをるなり

夏雨

夏草のみどりの若葉雨をうけてなびくすがたは見るも涼しき

秋露

霧うすきあしたの原の草のうへに置き渡す露の色ぞきよけき

冬雲

竹はらふあらしの音ははげしくて雪げにむかふ雲ぞこほれる

戀夕

待ちなれし契はよその夕ぐれにひとりかなしきいりあひの鐘

〔以上乾元二年四月二十九日仙洞五十番歌合〕

夏夜

草ふかきまがきの露に月を見て秋のこゝろぞかねておほゆる

新拾遺集第二
第三句「まが
きの露を月に
見て」に作る、

絶戀

をりくのわがわびはてし心をば人もやさすが思ひ出づらむ

庭松

雨の中にしをれてたてる庭の面の松のすがたは見れば淋しも

〔以上乾元二年五月四日歌合〕

寄花春

折をえて四方の櫻も咲くなれば春は名だかき時にぞありける

寄月戀

待つ人はむなしき床のひとりねにたのめぬ月の影のみぞさす

寄雲雜

見るまゝに星の光もきよくなりて雲ぞ晴れゆくあかつきの空

〔以上嘉元三年三月歌合〕

三十首の歌よませ給うけるとき見花

九重に春はなれにしさくら花かはらぬいろを見てしのぶかな

七夕を

秋風も空にすゞしくかよふなりあまつ星合の夜やふけぬらむ

三十首の歌よませ給うけるとき草花露

ゆふぐれは尾花がすゑに露おちてなびくともなく秋風ぞ吹く

〔以上新後撰集〕

早春のこゝろを

世ははやも春にしあれやあしびきの山邊のどけみ霞たなびく

花の十首の御歌の中に

花の中にいかにちぎりて櫻しも春にことなる名をのこしけむ

風後草花といふことをよませ給うける

夜すがらの野分の風のあと見ればすゑふす萩に花ぞまれなる

露をよませ給うける

秋されば我がそでぬらす涙より草木の露もおくにやあるらむ

秋の御歌の中に

野山にも秋のうれへや一つならし男鹿つまとひ蟲も鳴くなり

秋ふかき山より山にわけ入ればなほいろ添へる紅葉をぞ見る

名所の御歌の中にあらち山

あらち山夕こえくれて矢田の野の浅茅刈りしき今宵かもねむ

三十首の御歌の中に戀

ふけざらむその嬉しさのあすよりも今宵のうちの時のまもがな

恨戀を

よしさらば恨みはてなむと思ふきはに日頃覚えぬ哀さぞそふ

戀の御歌の中に

君故にたへずなりにし身ぞとだに知らじと思ふもかねて悲しき
憂きことも我身にむけてことわりと思ひなすには恨しもなし
今更にその夜もよほす雲の色よ忘れてたゞに過ぎしゆふべを
みこの宮と申しけるとき神無月のはじめつかたま
で紅葉し侍らざりける年櫻の咲きたる人の奉りて
侍りけるを御覽じて大納言三位にたまはせける
しぐるべき木末の色はつれなくて花をや時のものとながめむ
雑の御歌の中に

山風はふけどきこえず岩が根やたぎりて落つる瀧のひゞきに
その世こそなほ戀しけれもゝしきやわが友と見し庭のくれ竹

萬葉集の詞一句を題にて人々に歌よませさせ給う
けるに「ひかりは清く」といふことを

天つ日のひかりは清くてらす世に人のこゝろのなか曇れる

〔以上玉葉集〕

春雪をよませ給うける

いつしかと待たるゝ花は咲きやらで春とも見えず雪はふりつゝ

夏草をよませ給うける

今は身のことしげからぬやどにしもなほみちとづる庭の夏草

螢をよませ給うける

風そよぐあしまの螢ほの見えて波のよる待つほどぞすゞしき
三十首の歌よませ給うけるとき初冬時雨

今日よりの時雨よ何のためならむ木の葉は秋に染め盡してき

山時雨

いつしかと今朝はしぐれの音羽山秋をのこさず散る紅葉かな

冬の御歌の中に

都にはあらしばかりのさゆる日も外山を見れば雪ふりにけり

戀のこゝろを

憂き中はあすのちぎりも白玉のをだえの橋はよしやふみみじ

夜戀を

夏引の手びきの絲のうちはへてくるしき戀はよるぞまされる

遇不逢戀

一夜だになほへだてじと思ひしにうき年月のつもりぬるかな

恨戀の心をよませ給うける

名もつらし又もみぬめの浦波のあさゆふ袖にかゝるばかりは

述懐の心を

賤がやにかこふや柴の假の世は住みうしとてもあはれいつまで

〔以上續千載集〕

春の御歌の中に

朝なく外山の雲ぞにほふなる峯のさくらは咲きまさるらし

秋の御歌の中に

たなばたの五百機衣をりしもあれなどは秋を契りそめけむ

冬の御歌の中に

友千鳥月にしばなくこゑちかしうきねの波の夜半のまくらに

鞆旅の御歌の中に

都おもふなみだのうへは旅にごるも野山の露をまたかさぬらむ

戀の歌とてよませ給うける

ひとりねの涙かたしく袖の上をやどりなれたる月もうらめし
かこつべき鳥よりさきの別路は身のとがならで何をうらみむ

伏見院かくれさせ給ひてのころ時雨のしければよ

ませ給うける

露かけし昨日の秋の藤ごるもほしあへぬ袖もまたしぐれけり

〔以上 続後拾遺集〕

春雪をよませ給うける

たまらじと嵐のつてに散る雪にかすみかねたる眞木の一むら

春の御歌の中に

花鳥のなさけまでこそおもひこむる夕山ふかき春のかすみに
春かぜは柳のいとをふきみだし庭より晴るゝゆふぐれのあめ
何となく見るにも春ぞしたはしき芝生にまじる花のいろく
遠村花といふことを

さくら咲くとほちの村の夕ぐれに花折りかざし人かへるなり
春のあしたといふことを

花の上にさすや朝日のかげ晴れてさへづる鳥の聲ものどけき

雨中花を

雨しをるやよみの山の木がくれにのこるともなき花の色かな

首夏を

春くれしきのふもおなじあさみどり今日やはかはる夏山の色

夏の御歌に

小山田や早苗のすゑに風見えてゆくてすゞしき杉のしたみち

水鶏を

こゝろある夏のけしきの今宵かな木の間の月に水鶏こゑして

霧中鴈を

あまつ鴈霧のあなたに聲はしてかど田のすゑぞ霜にあけゆく

待月といふことを

こゑたつる軒のまつかぜ庭の蟲ゆふぐれかけて月やもよほす

秋霜をよませ給うける

夕霜のふる枝の萩のした葉より枯れゆく秋のいろは見えけり

九月盡を

月も見ず風も音せぬ窓のうちに秋をおくりてむかふともし火

冬庭をよませ給うける

しぐるとも知られぬ庭は木の葉ぬれて寒き夕日は影おちにけり

冬の御歌の中に

鐘の音にあくるか空とおきて見れば霜夜の月ぞ庭しづかなる

朝雪といふことを

岡のべやさむき朝日のさしそめておのれと落つる松のしら雪

旅の御歌の中に

飛ぶ鳥のながめのすゑも見えぬまで都の空をおもひこそやれ

忍戀のこゝろを

あぢきなや人のうき名をたてし故わが思をばなきになしつる

契明日戀といふことを

いくゆふべむなしき空にとぶ鳥の明日かならずと又や頼まむ

別戀の心をよませ給うける

わかれぢを急がぬ鳥のこゑよりもまだ空たかき月ぞうれしき

またや見むまたや見ざらむとばかりに面影くるゝ今朝の別路

戀の御歌の中に

慕ふかたの進むにつけて厭ひまसार人と我との中ぞはるけき

寄七夕戀といふことを

さらにこそ忘れしことのおもほゆれけふ星合の空にながめて

風前落葉といふことをよませ給うける

山嵐に脆く落ちゆくもみぢ葉のとゞまらぬ世はかくこそありけれ

夕山といふことを

夕山やふもとの檜原いろさめてのこる日かげぞ峯にすくなき

雑の御歌の中に

たづね入る山路の末は人も逢はず入相の鐘にあらしこそ吹け

鳥のゆくゆふべの空のはるくとながめの末に山ぞいろこき

あふぎみてわが身を問へば天の原すめる緑のいふこともなし

月を

一寸ぢに思ひもはてじ猶もこのうき世の友は月こそありけれ

雨夜思といふことを

獨あかす四方の思は聞きこめぬたゞつくくと更くる夜の雨

御ぐしおろさせ給ひて秋のはじめつかた永福門院

に奉らせ給うける

秋をまたで思ひ立ちにし苔ごろも今より露をいかでほさまし

後西園寺入道前太政大臣なくなりて後北山の家に

御幸ありて題をさぐりて人々歌よみ侍りけるに山

家水を

山ざとになきかげしたふ池水にむなしき舟ぞさしてものうき

神祇を

神路山内外のみやの宮ばしら身は朽ちぬともすゑをばたてよ

建武のころ雑の御歌の中に

しづみぬる身は木がくれの石清水さても流の世にし絶えずば

〔以上風雅集〕

三十首の御歌の中に春

春かぜはかすみの空にかよひきて梅が香にほふ宿のゆふぐれ

正和元年八月十五夜五首の歌講ぜられけるとき秋

朝といへることをよませ給うける

けさの朝け袂すゞしき風たちていとはや秋のしられぬるかな

秋の御歌の中に

待ちわたる絶間は遠き月日にて今日のみかよふかさゝぎの橋
たなばたの五百機衣まれにきてかさねもあへぬ妻やうらみむ

鹿の音もとほざと小野のはぎが花そでにうつしてかへる狩人
閑庭露といへることをよませ給うける

浅茅原はらはぬ庭の露のうへにこゝろのまゝにやどる月かな
海路の歌とてよませ給うける

うなばらや風にたゆたふ海士小舟ゆくへあやふき波の上かな
旅の歌とてよませ給うける

都おもふなみだの玉もとゞまらず夕露もろき野邊のあらしに
釋教の御歌の中に

教へおくそのしなぐの法の門ひらくる道はひとつなりけり
戀の御歌の中に

あやにくに消えぬうき名やとゞまらむ跡なき空に身はたぐふとも

續現葉集第五
句「ひとつな
るらし」に作
る、

須磨の蜚のしほやき衣それよりも恨むる袖はなほもかわかぬ
人ごゝろ何にたとへてうらみまし昨日にかはる人のつらさを

雑の御歌の中に

和歌の浦や憂き人なみの身もつらしみがきし玉の跡の藻屑は

〔以上新千載集〕

朝花といふことをよませ給うける

あかず見る山櫻戸のあけぼのになほあまりあるありあけの影

冬の御歌の中に

見しやいつぞ豊の明のそのかみもおもかげとほき雲の上の月

伏見院の御忌のころ花園院いまだ位におはしまし

けるに紅葉につけて奉らせ給うける

かきくらす袖の涙にせきかねて言の葉だにもかきもやられず
戀の歌とてよませ給うける

逢ふ事も身には渚による波のよそのみるめにねこそなかるれ

〔以上新拾遺集〕

花園院位におはしましける時大なるたかむなを奉

らせ給ふとて包紙にかきつけさせ給うける

百敷にみどりそふべき吳竹のかはらぬかげは代々ひさしかれ

〔新後拾遺集〕

嘉元元年伏見院に三十首の歌めされけるついでに

鞆中烟といふことをよませ給うける

眞柴たくけぶりのすゑを尋ね來て宿とふ山のくれぞさびしき

〔新續古今集〕

子日を

もろ人の千代のかざしのためとてや今日の子の日に相生の松

鵜河を

遠つ河鵜船にともすかゞり火の消えぬと見れば又ぞほのめく

夕立を

過ぎぬれどなほ雲のこる夕立のなごりばかりの宵のいなづま

初秋の心をよませ給うける

初秋のあまつ星合の小夜ふけて吹きたつかぜぞ袖にすゞしき

月をよませ給うける

月のこる汐干のかたはたづ鳴きて秋はふけひの浦路かなしも